「あなたが寂しいなんておつしやつちやあ駄目よ……。」

「千鶴子僕の求むる人は強い人でも完全な人でもない、本當の人生の姿の寂しさを知つてゐる人だ……そんな人が村に一人だつてゐるだらうか……。」哲郎はかういつて深い溜息を吐くのであつた。

此頃になつて千鶴子の姙娠の徵候は、經驗のない哲郎の目にもそれと首肯けるやうになつた。第一彼女は不眠症になり、神經がともすれば異常に昂奮すること。第二食物が全然變つて來たこと、第三、月々見るべきものを見ないこと、そして此妻の容態を最初に疑問を持つたのは階下の主婦であつた。

「先生、お祝ひしさされ、奥さんがお日出度でさ。」とか又は

「奥さんがお可愛さうだ、お母さんの處へお返しなされよ。」など主婦は哲郎を掴へて言ひ〳〵した。

✝

或日哲郎は妻と次のやうな會話を交へた。

男「毎日お前は幸福かい。」

女「……」

男「恐らく幸福ではないだらう……僕も幸福ではない……。」

女「……」

男「何故幸福になれないか、お前は考へたことがあるかい。」

女「他人のお金でこんな生活をしてゐるからよ……私きつと、東京へさへ出たら元氣になれてよ、そしたら私以前のやうに學校へでも、會社へでも勤めてよ、あなたのおつしやる通りに散歩にも出てよ……。」

男「違ふよ、幸福になれないのは、お前と僕との性質だ……境遇とか、外界の事情とかで

人間の幸福は亂されるものではない、第一お前が苦勞性だからさ……。」

女「だけど私如何して此頃こんな氣になつたんでせう……みんなあなたと一緒になつてからよ……。」

男「そうだ罪は確かに僕にある、なだらかな道を樂しさうに手をつなぎ合つて行くことがお前の幸福の凡てなんだ……かう言ふことがお前を侮辱することにはならない……暗い恐ろしい深淵のみを探らうとする僕の道づれとしてお前は餘りにもかけ離れてゐる。本當に今日まで僕が手を取つて引いて來た道は何と言ふ危かしい道だつたらう……さあ千鶴子お前は疲かれたらう……僕の胸にお休み……かう言つてかき抱く僕の胸の血は、黑づんだ懷疑に固つてゐるのだ、抱擁の瞬間でもお前が曾つて手を取り合つた戀人との甘い接吻の味を追想してはゐないかしらと……熱愛の反側に燒くやうな嫉妬と、それに伴ふ憎惡とがつきまとつてゐるのだ、あゝそれにしてもお前は何時になつたら明るい花のやうにほゝ笑む日が來るだらう。そして僕の暗い闇を行くやうな心を明るみへ導いて呉れる日が……。然し僕はもう倦き〳〵した。此はち切れるやうなパッションを持つた若い男がお前の枕許で明るい光りも浴び

ずに毎日〳〵じめ〳〵した、引き入られるやうな日を送つてゐることは、だからね、此頃恐ろしく捲き返してゐる海など見てゐると變に恐ろしい誘惑を受けるのだ……千鶴子お前は泣いてゐるね。淋しいの。」

女「エゝ淋しいわ、貴方がそんな顏をしてゐらつしやつちや私なほ淋しくなるのよ、ごしようですからそんなお顏をなさらないで下さい。」

男「……」

女「……」

男「おゝ風が寒い……障子を閉めてくれ……。」

女「海が大變荒れて來てよ……。」

十一

或日の午後哲郎は濱を歩いてゐた。彼は立ち止つては眤と砂の上に眼を落した。潮色の甲

を持つた蟹は砂を踏む彼の足音に驚いて深く砂の中に隱れた。さま〳〵な具や海草の類が波のあぶくの消へて行く跡に殘されるのであつた。打ちよせては遠退いて行く潮の跡は鏡面のやうに美しくみがき上らげれて、晴れた大空を流れる千切雲の影まで映すのであつた。波に洗はれた岩層には、無數のかきや、名も知らない小貝がしがみついて巣喰つてゐる、そして又大海の中には無盡藏の生物が棲息してゐることをも思はせられた。海は、何といふ多くの神秘を藏してゐることであらう。この時哲郎は今更らのやうに、驚異の瞳を瞠つたのである、濱は一頃からみると、著しくさびれた。多くの避暑客のために作られたやうな旅館の裏の涼み床も今は忘れられたやうに捨てられてゐた。何處の二階を見ても華美な都會人らしい服裝をした婦人の姿などは一つも見出せなかつた。華やかな短い武將の生涯の樣な避暑地の光景は、哲郎の心を深くいたましめたのであつた。彼は初めて此海岸に千鶴子を迎へに來た時の希望に燃えてゐた自分と、自分の始めた此新しい生活をも打壞さうと絶へず考へてゐるやうな現在の自分との心の變化を振返つて見て、慄然として震へ戰かずにはゐられなかつた。かつては唯一の心の宮として、辿りつかうとしたやうな彼女ではなかつた。自分は既に愛す

ると言へ、妻といふ名の許に、幾度か、脾弱な妻に暴力をも加へたではないか……。然も習慣といふのは何と云ふ恐ろしいものであらう。自分が結婚する前に想像することすら不可能だつた愛するものに對する暴力が、かう迄で容易に行はれ得るとは……最初……哲郎は一寸思ひ出すやうな表情をした。恰度其時彼は何時かの夜牧と千鶴子と三人で腰を下ろした砂山の上に來た。彼は砂の上に倒れるやうに、足を放げ出した。さうだ……最初……あの青年畫家の歸つた日：唯僅かに買物に出た彼女が、少し用足しが手間取れて、途中で偶然に此處を引き上げやうとするあの男に逢つた、に過ぎないのかも知れないのだ……それをあゝ自分は何といふ嫉妬深い人間だらう、とう〳〵自分は彼女を撲つた。まるで彼女があの青年畫家と示し合せて外出したかの如く邪推して、併も其時に、自分はそれから來る自責と、彼女に對する憐憫の情が一杯に胸の裡に溢れて來るのを覺えたものだ……それだのに此頃の自分は：：暴力に或種の快感の伴ふのを否定することは出來ない。併も自分が彼女に加へる暴力は何と言ふ根柢の薄弱なことだらう……二度目に……さうだ僕が彼女を撲つたのは……實に自分の氣紛れから……もし僕がひよつと死ぬやうなことがあつたら……お前は如何する……此ん

な愚問を持ち出したことに原因してゐるのだ・・・彼女は言下に私だつて死にますわ・・・と答へたのだ・・・彼女は果して自分の後を追ふことが可能だらうか・・・成るほどたゞ一つの場合だけはその可能を認めることが能きる・・・自分の死から受けた急激な打撃によつて彼女が殆ど没理性の感情の頂點にある場合、彼女がもし自殺を決行したとしたら・・・・・だがしかし、自分の死床に多くの人が集つて來る、皆は彼女に氣を落させまいとする・・・彼女は緊張した狀態にあつて數日間を過ごす。斯うして時の流れが自分に對する愛着と記憶とを薄いものとする。一年經ち、二年經ち、そして其間に多くの異性に接する、園園の人も彼女に再婚を勸める・・・そして又彼女の性的な惱みは・・・さうだ自分はあの時かう思つたのだ。それで「いや信じられない。」と言つたのであつた。と彼女は「えゝ子供が生れたら私一緒に死ねないわでも小供が可愛相なんですもの・・・・・」かう答へたのであつた。それで自分は「ではお前は子供に對する愛着が僕より深いといふのだね。」と詰るやうにいつたのであつた。「がまあそれは可い、只一ッ僕とお前との創造である第二の生命を誰れに犯させることができよう・・・・だから此小さい生命の爲にお前が生きながらへようといふことは僕も肯定する、だが千鶴

子考へてごらん。若い女性が自分及び自分の愛する者との少くとも人、二人の肉體の糧を得て生きるといふことが、そんなに容易なことだらうか、なる程僕はお前の言ふやうにお前の禁慾生活の可能を認めるとしても、此一つの事實だけは肯定する譯には行かない。」自分の言ひ終るか、終らないかの裡に、「あなたは私を侮辱してゐるわ。」彼女はかう言つて立ち上つたのであつた。此頃、絶へず彼女に脅やかされてゐる自分は、彼女は是をきつかけに、自分から去つて東京へ歸るのだ・・・と思ふと自分の手は自づと彼女の襟に觸れた。「何處へ行くのだ。」かう云つて引き戻さうとした時、彼女は、「エヽ何處へでも私の勝手です。」かう云つて自分の手を振り切らうとしたのだ。自分は矢庭に躍りかゝつて彼女の頰をしたゝか打つたのだつた。それから・・・哲郎は此處まで思ひ續けて、耐えられないやうに頭を押へた。此頃の俺の頭は如何かしてゐるのかも知れない、自分では少しも氣付かずにゐるが、きつと冷靜な第三者の眼から見たら變になつてゐるに違ひない・・・。それが此頃では如何だ、ある一つのさゝいな事件・・・そうだ、それは一日の裡に一度位は必らず經驗するのだ・・・が二人の感情をへんにそぐのはないものにする。そして、そうした小さないきさつの後に自分は彼女を何時

も經驗する感情の最高潮に達した瞬間に於て抱擁しないではゐられない…全くそれから享ける快感が今では殆ど自分に取つて、阿片中毒者のそれにも似た病的なものになつてゐるのだ。善良な、そして衰れな妻は自分の嘲罵や憤怒が、かうした享樂感の伴ふものだとは知らないのだ。そして又自分の怒りや、嘲笑の原因としては餘りに其事件の小さなものであることを知つてゐる妻は、さうした事件を「僕達はお互に解放されよう。」とか「お前は僕から去つて呉れ。」とかいふ最後の問題にまで持つて行かうとする自分を、彼女に對する愛の動搖に起因する彼女から離れる爲めの下心ある策略でもあるかの如く邪推するのだ…だが自分はそんなことは顧みようとはしないで、先づ自分の感情を其頂點にまで引き上げることにせき立つ、此んな時、自分は「東京へ歸れ…結婚生活がこんなにまで惱み多いものだとは思はなかつた。」自分は毒々しく罵る、彼女は立ち上つて着物を着換へようとする…とう〳〵此處まで來た…もう一歩だ…、自分は自分の心の舌をペロリと出す。だがいよ〳〵彼女の體が一歩外へ出ようとする時、自分の體は…其瞬間實に衝動的に彼女の傍に近よるのだ…自分の左の手が彼女の襟首に觸れたかと思ふと、次の瞬間に右の掌から鋭い刃ものの上を

滑るかのやうな小氣味の可い觸覺が全神經に傳はる…そして次の瞬間には……

哲郎は立ち上つた。彼は此時ひどく謙讓な心持になつてゐた。妻が傍にゐたら彼女の足許に跪きたい衝動をさへ感じた。自分と彼女とは、此廣大無邊な宇宙の間にあつて、併も幾十億の人間の裡から只二人寂しいつきることのない旅路の道伴れとして選ばれたのではないか…たとへ過去の彼女の心象の面に映つては消へて行つた多くの男性の影があつたとしても、今は既に最後のものまでも自分の前に投げ出してゐるやうな彼女の信頼をどうして疑ぐることが出來よう。併も妻の腹には既に自分の第二の生命さへ宿つてゐるのではないか…おゝ衰れな妻、自分の寂しい道づれ…、自分が父となる…彼は此の考へをはつきりと、自分の上に持つて來て考へることは能きなかつたが、漠然と、もし其頭の格好や顔立やが自分に似た嬰兒が妻の手に抱かれてゐるとしたら…かう思ふと、何か奇蹟にでも打ちつかつたやうな心持がするのであつた。彼の足は自然と家の方に向つた。

十二

哲郎は或日の日記にこんなことを記した。

俺は果してM氏のやつてゐる此の仕事に全的に傾倒し、最後迄でも村に殘つて苦闘する勇氣があるだらうか。自分は時折り恁う自分に反省の目を向ける。吾々人類が永遠に平和で、兄弟のやうに相睦み合ふ生活…果してさうした世界の建設を自分は信じてゐるだらうか。殘忍と、奸惡と、呪詛と、猜疑と、暗闘、自分があの村へ移つてから自ら愛の宣傳者と名告る人々の間に於てすら、餘りに多く見せつけられたこの執拗な人間性を如何すれば可いと言ふのだ……、さうだ、第一自分自身のうちにともすればのさばらうとする此の不可ない性質を……自分がよく千鶴子から東京に移り住む事をせがまるゝ度に〆。と云ふ強い否定を與へ得ないのは何故だ……自分は千鶴子の言葉に誘惑を受けないと言い切る事が出來るかどうか：自分は東京の郊外に瀟洒な邸宅を構へて放肆な文人の生活を心に描いては居ないか、自分は

村に移つて來る時、果して此の仕事の爲めに全生涯を捧げる決心を持つてゐたかどうか、人類的な此の仕事の事を考へる前に自分は自分の藝術のことを考へてはゐなかつたか、たとへば文壇的な野心といふやうなことを、僞善者よ、お前は愛の村の建設を否定してゐるのではないか。それだのに、その主權者にも等しいM氏から愛する者の療養の費用を貢いでは貰はなかつたか、さうだ心の底に東京に移り住む事を望んでゐる。それを自分は何故に決行しないのだ、都會の生活に對する恐怖か、村に對する愛着か……、さうだ自分は其何れをも否定することを止めやう……がさうした外面的の事情よりもつと複雜な、脱れる事の出來ない桎梏が自分の全生涯の自由を拘束し、あの城の土に縛りつけやうとしてゐるではないか、園村に對する斷ち切る事の出來ない情實と、M氏から惠まれた多額の金は既に情實の衣となつて自分の身を幾重にも包まうとしてゐるではないか。丁度、自分の目の前に廻轉してゐる蠅取器の蜜についた蠅のやうに、甘い蜜汁に醉つて、漸う陶醉から醒めた時——身は脱れる事のできない網の中に飛び廻つてゐる事を發見する、藻掻く——足掻く、然し凡ては自分に取つて不可抗力である。

十三

哲郎は一頻あれほど乗氣になつてゐた仕事も、此頃では捨てたやうに顧みやうともしなかつた。彼は毎日のやうに考へ込んでゐる人であつた。村へ歸へるか、東京へ出るか・・・其何づれかを撰ばなければならない。と言つて決して妻が全快したと云ふのではなかつた。彼はもう一日でも、此恐ろしい發作のある妻と二人切りで此海岸に生活することは彼の弱い性格としては、耐えがたいことであつた。それほど彼に取つて、此海岸の生活は悲慘な心の記錄であつた。其結果として、哲郎は其月の十五日の村の休日までに着くやうに此處を引き拂ひたいと園村の許まで書き送つた。突然歸つて家がないやうな場合は自分は城に住み、妻は園村の家に暫く置いて貰ひたいと言ふことをも附け足した。二ヶ月近く親しんだ此土地の人とも別れるのだ・・・・と思ふと、哲郎夫妻は妙に愛着を覺えるのであつた。別けても近所の特別な厚意を示して呉れたやうな漁夫の細君達には強く別離が惜まれるのであつた。階下の家に

はいろ〳〵な小道具を、隣家にはコンロのやうなものを殘して行くことにした。立つ日は朝早く起きてお壽司を作つて近所に配つて行くのだといつて妻も俄に元氣を取り戻した。近所の漁夫たちもひどく別れを惜んだ。

「生先何時でも來されよ・・・・待つて居やすでな・・・・。」かう言つて階下の主婦は泪を流して再び此處に來ることを哲郎夫妻に誓はせた。哲郎は今後十年の間に必ず國にあるGと言ふ有名な寺院に參詣させることを約束した。主婦は其處で六年前に死んだ良人や子供に逢へるのだといふ硬い信仰を持つてゐた。彼は其信仰を尊く思つた。彼夫妻が立たうと思つてゐる十二日は非常に荒れた。深夜凄じい猛雨が襲來して、雷鳴は恐しく轟き渡つた。人を集める警鐘は黎明まで寂しい漁師街の上に響いた。眠りに陷ちようとする彼は妻のために幾度か搖り醒された。妻は黎明まで一睡もしなかつた。朝になつて雨は止んだが風は依然として收まらなかつた。眠らずに過した妻の反動は明らかに來た。妻は全身に非常な惡感を覺えると言つた額に觸れて見た哲郎の手に熱は可成高いやうに思はれた　哲郎は兎に角、醫師を呼ぶことにした。彼は戸外に出た。入江には黄濁色の潮水が物凄く湛えてゐた。もやつてある幾艘かの

魚船は船腹まで水に浸つてユラ〳〵としてゐた。魚市場の前の處はもう二尺ほどで水が溢れようとしてゐる。漁夫や、女房達や、子供は岸に群つて騒ぎ立つてゐた。漁船が三艘押し流されたなど語り合つてゐた。哲郎は醫師を訪ねて妻の容態を説明して直に來て呉れるやうに依頼した。醫師は快よく承諾した。哲郎が家に歸つた時、妻が階段を下りて來るのに逢つた。そして彼女が鍋を持つてゐるのに彼は少からず面喰つた。醫師が來た、妻を一通り診察した。

「眠れない故でせう。それから何か考へるのはよくありません……。」と言つた。

「姙娠の徴候はありませんか。」其時哲郎は非常な努力を持つて訊いたのであつた。

「其疑ひもありますが乳首に熱を持つてゐませんから、或は月經不順から來てゐるのかもしれません。」と醫師は答へた千鶴子は此時「長い汽車旅行は如何でせう。」と訊ねた。醫師は差し支へないと答へた。「下劑と鎮靜劑とを上げますから。」かういつて醫師は歸つて行つた。哲郎は村へ立つ日を一日延すことにした。其日の午後濱に出てゐた千鶴子が「早く、早く、離船なのよ。」かう言つて二階に書見をしてゐた哲郎を手招きした。で彼は濱に出た。漁夫や漁

夫の細君が大勢濱に立つて、沖の一點に瞳を凝らしてゐた、防波堤の上にも長く人垣を作つてゐた、中には竿の先きに手拭をつけてそれを高く上げて目標にしてゐるものもあつた。海には巨きな濤が卷き返してゐた。哲郎は沖を見た。青島から遙か西方に當つた沖合に一艘の漁船が波の上に高く打ち上げられたと思ふと瞬く間に波の影に船體を深く浸し去りつゝあるのが認められた。

「體の方が續かない、駄目かも知れない。」傍にゐた一人の漁夫が不安そうに哲郎を顧みて言つた。

「助けに行く譯には行かないんですか。」

「いやどうして、助けに行つたら共死だ。」漁夫は首を振つた。妻は色を失つてゐた。

「何處の方ですか、細君や子供もあるんでせうね。」と彼は訊いた。漁夫は船には確か三人乘つてゐる筈だと答へた。そして其一人は彼等夫妻の借りてゐる家の東隣りの一人息子だと答へた。其家は哲郎が時折風呂を貰ひに行つたことのある家で、家には確か七十近い老人と中氣で足の利かない老婆と、六月のお腹を抱へてゐる、十九になる細君と三つになる男の子とが

ある筈である。其息子は去年聯隊から歸つたやうな青年であつた。哲郎は其一家の爲に青年の助かる事を祈つたのであつた。波は容易に靜らなかつた。哲郎は二階に引き返した。妻は怯びえるやうに彼の後に從つた。家に歸つて見ると階下の主婦も濱へ出てゐて留守であつた二階へ上ると彼等の留守に電報が來てゐた。哲郎は一寸驚いて封を切つた。イヘナシカヘルナイサイフミと言ふ電文であつた。彼は落膽した。妻は「どうしたんでせうね。」と不審さうに言つた。哲郎は園村が打電したものだらうと思つた。とにかく手紙を待つことにした。

船はとう〳〵助からなかつた。

「東でも年寄が氣の毒でな・・・一人息子を海に取られて了つた・・・先生・・・子供丈は漁に出したうない・・・。」かう言つて階下の主婦は其晩泣きながら哲郎夫妻に語つた。待ちあぐんでゐた村からの手紙はそれから二日目の朝哲郎の許へ届いた。そしてそれは園村でなしに意外にもM氏の手紙であつた。哲郎が村へ歸ることを獨斷で定めたのを不服らしい激した文面であつた。廿日前に歸ると皆に迷惑をかけることになると書いてあつた。哲郎は不快な感情なしに此手紙を讀み終ることは能きなかつた。

「何と言ふ抱擁力のないM氏だらう。」と彼は妻に言つた。たとへ家がないにしても、狹い家に割り込んで住む迄も住民の一人が病氣が全快して歸るのであつたら喜んで迎へるのが自然だと思つた。こんなことに肚を立てるのは餘りに滑稽だと思つた。哲郎は貞子夫人の意志が其影に動いてゐるのは否定出來ないと思つた。貞子夫人を始め村の者が自分達の歸るのを喜ばないのであつたら村に歸るのは止めやうと思つた。かう思ふと哲郎はひどく腹立を覺えて來た。M氏は貞子夫人の生活の全部を肯定してゐる。そして哲郎自身は貞子夫人に微塵の尊敬をも持つことは能きないのであつた。西岡や宮津や、多く彼の先きに行つた友の取つた態度も此處から出發してゐる。哲郎は人類愛を眞向から振り翳してゐるM氏が一人の妻を教化し得ぬ處に何物か教へられる物があるのではないかと思つた。

「千鶴子・・・僕は村へ歸るのは止めやう。」と此時沈み込んでゐる妻を顧みて言つた。

「ほんとうなの。」彼女は笑つて尙半信半疑で言つた。

「あゝ本當だ・・・園村には濟まないが・・・どうせ村へ歸つた所でそう長いことではない・・。」

哲郎は眞面目な調子で言つた。妻は俄に勇み立つた、哲郎は先づ最初に旅費を作らなければは

ならなかつた、それで彼は東京にある○といふ親戚と國の方の親しいTといふ友人に宛て、無心の手紙を書いた。いよ〳〵村に歸らないことに定めてみると哲郎は寂寥の底に沈んだ：：郷里時代から變らない友情を持ちあつてゐる園村、善良な無神論者の牧：：哲郎は此愛する二人の友を失ふことは堪らないと思つた。そして又多くの友に村を去ることに就いて手紙を書き送つて見ると、自分の運命を破壞する僞に打ち下ろした第一の槌の反響が何處まで及んで行くかを眺めてゐるような不氣味な心持ちがするのであつた。

午後哲郎が二階で讀書をしてゐると隣家の葬式が通つた。轉覆した船と、漁夫の着てゐた仕事着が一枚、青島の南端の岩角に漂着したといふのであつた。隣りの家では朝から大工が來てカンナの音をさせてゐた。其傍に立つてゐる寂しい老人の姿が哲郎の目に深く殘つてゐた。階下の人の注意で雨戸を閉めて置いたので哲郎夫妻は戸の隙間から表を覗いて見た。赤い長旗に故人の姓を記したのが先頭に立つて、其後に僧が續き、四人の青年に擔がれた白木の輿は中央にあつた、輿は祠のやうな格好をしたもので漂着したといふ着物を其上に被ぶせてあつた。髪に白い布を載せた女が十人ほどと、近所の會葬者の群とが午後の漁師町を靜か

に練つて行つた。哲郎は妻に命じて幾何かの金を隣家へ届けさせた。

十四

哲郎は朝、眠りから醒めた時ひどく齒痛を覺えた。其故か彼は昨夜一晩中種々な夢を見續けて來た。殆ど記憶にないやうな人の顔を夢の中で見た。狂死した從姉の良人のKといふ人にも逢つた。遠い國の兄夫婦にも逢つた。不思議にもそれが皆金に關連した夢だ。矢張り自分に金のことが氣に掛つてゐるのだと思つた。金が果して出來るだらうかといふ不安が募つて來た。○がもし旅行先きであつたら：：。それから又貧乏なTは金を如何う工面しても出來ない場合を想像することが出來る。かう思ふと哲郎はひどく危つかしくなつて來た。彼はもう一人の友に電報で金を賴まうと思つた。彼は齒痛を堪らえて局へ行つた。局で彼宛のはがきを一枚渡した。それは果して園村からであつた。彼の寂しさに同情して早く歸る日を待つ、併し皆の云ふ廿五日にした方が可いと云ふやうなことを親切な筆で書いてあつた。哲郎

はこのはがきを讀んで誰れも味方のない村に踏み止つてゐる園村の姿がはつきりと想ひ返された。園村は何時も變らない愛を自分の上に持つてゐるのだ・・・それだのに自分は、今、彼を裏切つて金策をめぐらしてゐる・・・園村は自分が今裏切らうとしてゐることなど少しも知らずに信じ切つて自分の歸る日を待つてゐるのだ、まるで旅に病む愛兒の歸國を待つ慈母の心を持つて待ち望んでゐるのだ。・・・彼はかう思ふと自分の心を深く愧ぢずにゐられなかつた。彼はとう〳〵Kに打電する勇氣を失つた。といつて彼は決して此突嗟の間に村を去る事を止めたのではない・・・彼は左手に此厚い友情を盛つた友の手紙を持つて、右の手で全然此友情を裏切る電文を記すことは餘りに恐ろしい冒瀆であることを感じたからであつた。道々哲郎は自分の心の恐しく動亂した狀態にあることを感じた。彼は家に歸ると階下にゐた妻を二階に呼んだ。

「千鶴子これをごらん。」彼はかう言つて其手紙を指し示した。「園村は、僕達の歸るのをこんなに待つてゐるのだ・・・僕たちの寂しさにも同情してゐる・・・あの人も寂しいのだね。」

彼は妻の答へを待つやうに言つ

「ほんとね。」妻は引入れられるやうにはがきを幾度かよみ返してゐる。

「ねえ千鶴子、もう一度僕たちは村へ歸らう。どうして園村の期待を裏切ることができよう。」

彼はかう言つて妻を視た。彼女の顏には明らかに失望の色が浮んだ・・・。

「でもお母さんの處へも言つて上げたのだし・・・今更困るわ。」

「通知を出した處へは僕が書く。OやT君にも言つてやらないと惡いからね。」

「どうしても村へ歸るの?。」彼女は氣の無さうに言つた。

「そうして呉れ、園村に全く濟まないから・・・園村に良い話相手の出來るまで・・・。」かういつて哲郎は村へ歸つて若し彼女に取つて不幸であるやうな場合は直ぐ村を去るといふ條件の下に澁々ながら妻に承諾させたのであつた。その日の夕方東京の親戚のOから廿圓、通常替爲で送金して來た。そして彼が村へ移る時不賛成を唱へたやうな其人の手紙には、田園の讃美は都會にて活動のフィルムで見る位が眞の讃美であるといふやうな不快な文字が記してあつた。哲郎はひどく不快を感じた。金はもとより必要のない狀態にあつたので妻に命じてOに返送させた。「此仕事がたとへ形の上に於て失敗に終つて、あらゆる世の中の人の嘲笑の的

となるやうな事があつても、此仕事の精神は人類の絶滅しない限りは生きて働くのだ……それだ可いのだ！　人が一つの仕事を試みやうとする時、其結果のみに心を煩はすな、其結果の如何を思つて躊躇するほど怯懦であつてはならない。たゞ誠實ならば可い。さう言ふ戰士こそ、人生の野に於ける得難き勇士ではないか。勝つて歸るも可い、負けて歸るも可い、自分は其何づれをも讃へ、何づれにも疲れた魂を潤す可く一碗の清水を備へるであらう。」彼は日記を展げて其日こんなことを書き付けた。

十五

哲郎夫妻が海岸を立つたのは、園村が去つて恰度一ヶ月目の日であつた。近所の人々の中には、酸いものを要求する千鶴子の爲に青い密柑の果を、葉の附いたまゝ捲つて來て呉れるやうな老婆や、生烏賊の干したのや、鰺の干物を荷の中へ加へさせるやうな主婦もあつた。言ひ合はせたやうに彼等は入江の邊まで送つて來た。通りの店やの女將さんの中には襷を外

して表に出て來るやうな人もあつた。

哲郎夫妻は其朝九時の汽車で折生迫驛から追憶の深い青島の海岸を捨てた。

十六

何んといふ物凄い四邊の光景だ。岩疊な岩窟の中には警護の若者の持つ松明の赤い焔から立ち昇る油煙がもや〳〵と一杯に群り罩めてゐる。光りの通はない岩窟の隅々には、魔女や妖精や、毒蛇の眼だけがぎら〳〵と輝き、其間から底氣味の惡い笑聲と、囁きとが聞えて來る。さて中央には高い四角な大理石の柱が立ち、其てつぺんに泰然として胡座を搔き、其光る眼をぎろ〳〵と動かしかて、物慾しげに四邊の光景を眺め廻してゐる一人の男がゐる。彼は何を探し求めてゐるのだらう……其下に是れは又何んと言ふ恐ろしい顔の男だ、兩鬢から廣い下顎にかけて生へ伸びた針金のやうな荒い髯が、其骨格の逞しい體全體によく調和して、山男といふ感じを起させる。彼の手に光つてゐるものは何んだ、劍だ……おゝ恐ろしい劍だ。

全體自分は何の爲にこんな處へ迷ひ込んで來たのだ・・・此處は何處だ、青島の東端に在る岩窟のやうでもある、が如何うしてそんなことがあり得よう、自分はもう廿日餘りも以前にあの海岸から村へ移つて來たのだ。今迄物凄い四邊の光景に氣を取られて怯え切つて居た彼が吾に返つた時、隣に立つてゐる一人の男が言つた。「見ろあの女が君を見て笑つてゐるぜ、ほら彼の男に何か囁いてゐる。今度はきつと君の番だぜ。」言はるゝまゝに彼は顔を上げて視た。其處には、おゝあの女が・・・是は又如何うした事だ・・・あの女は、貞子夫人は、千鶴子と共に此處に移つて來た日、途中の高城からM氏と共に確に東京へ向けて發つたのだ・・・それだのに、おゝあの女が、又しても薄氣味の惡い笑を浮かせて・・・あの高い石柱の上の男と何事かを示し合つてゐる。と其處へ左の方から靜に警護の若者に引き立てられて歩んで來る若い女がある。體を凝らして見ると、あゝ・・・・彼女だ・・・・千鶴子だ、私の女、戀人・・・・妻・・・・だどうか其女だけは助けてくれ、私の妻だ・・・・併もお腹に子供さへある・・・・弱い女だ・・・・おゝ神よ、彼がかう呼ばうとすると舌端が硬ばつて聲が出ない。彼女の傍に駈け寄らうとすると體は一歩も動ない・・あゝ劍が・・・・劍が・・・・悲鳴が・・・・彼女の聲が・・・・おゝ、其時哲郎はぽつか

りと眼を開いた。鮮かな朝の光は窓の葦簾をすべつて雜然とした彼の枕下にまで流れた。夢だ、何んといふ不快な慘たらしい夢を見たものだらう、かう獨り言つて彼は褥の中から神經的に視線を其處へらへ放けた。彼の眼には自づと取散らされた千鶴子の普段着や、書籍や、皿や茶碗や、さま〳〵なものが映つた。さうだ、今日は最後の日なのだ。村を立たなければならないのだ。あれから・・・漸うまだ廿日餘りにしきやならない。だが・・・かうなることが當然の經路でもあり、又自分があの朝、青島の海岸を立つ時、全然かうなる日を心に期してゐなかつたといふのではない。だが何といふ早く其日が來たものだらう・・・最後の日が・・・。さうだ彼の日、二ヶ月振りで青島の海岸から懷しい城へ返つたあの日、F旅館で東京に向けて發たうとするM氏夫妻と別れてあの黄櫨の並木道まで來た時、自分達を迎へに來て呉れた園村と牧と、さうだあの中に若し快活な角田の姿が見出せなかつたとしたら・・・こんなに迄早く城を立つやうな結果にはならなかつたのだ、角田は全く愉快な、魅力に富んだ青年だつた。彼は自分が村に移つて來る途中S市で會つた時、長く伸してゐたやうな頭髪をすつかり短かく刈り込んで、子供のやうに可愛い眼をくる〳〵させて其時自分の手を握つたのだ。

「おゝ淺香君……歸つたね……。」

「君が來てゐたの、少しも知らなかつた……」哲郎はかう言つて彼の手を强く握り返して、

「さうさう、君に紹介するのを忘れてゐた千鶴子。」かう言つて其時哲郎は彼に妻を引合せたのだつた。

「あゝそうか、お祝ひをいふのを忘れてゐた、僕角田です。」彼は快活に笑ひながら妻に會釋した。

角田……おゝ何といふ可愛い奴だ……男の自分でさへ彼に接してゐると何んだか自づと心持ちが拓けて行くやうな氣がするのだ……そして又彼奴は畵にかけては、圖抜けた才能を持つてゐるのだ、其事は可成有名な事實だ……自分の此憂鬱で、氣短で、併も氣違ひ染みた性質に比べて何んといふ違ひだ……かう思ふと自分は、彼に對してある恐怖と、危險とを感ずるやうになつた。それで自分は妻が彼に對して如何な態度を示すかを絕へず警戒の念をさへ抱くようになつた。

「畵がどん〳〵出來る、もう此方へ來てから十號の人物と、風景とを仕上げた。」角田は、歩きながらこんなことを言つた。それにしても、もう何時だらう……と此時哲郎は追想から返つた。さうだ、俺は今日正午頃までに彼女の待つてゐるF旅館へすつかり荷物を整理して持つて行かなければならないのだ……だがそれ迄には角田も、牧も、園村も來て呉れる筈だ……人間といふ奴は何んといふ奇妙なものだらう。農具置場を其儘使つた此土人の住家みたいな掘立小屋も愈々去るとなれば相當に愛着の伴ふものだ……彼はかう思つて頭を巡らして見た。隅の方に室に不調和な金文字入りの洋綴りの書が十二三册亂雜に竝べられてある、中央にダ●ヂンチの描いた天使の置額が据えられてある。處々青竹で止めた荒莚の上に張り廻した白い幕に提灯が一つ吊るされてゐる、これは深夜哲郎夫妻が丘一つ隔つた共同住宅や、園村の家に出かける時に用ひたものだ……木目樣の額が二面、其外に寢具、竹行李が一つ、僅か一ケ月に充たない住み家ではあるが彼等夫妻に取つて、切實な追憶の伴ふ此小さな王國は何一つ他人の掠奪を許さない此の地上に於け彼等の唯一の持物なのだ……竹で編んだ天井を見ろ、其處には園村の愛が微笑んでゐるではないか。四壁の荒莚の影には牧の善良な笑顔が覗いてゐる。土間の隅から漂つて來る黴臭ひ土の香も今は懷しいものゝ一つだ……あの晩……初

めて此小屋に住むやうになつたあの晩・・・月の美しい夜だつけ・・・さうだ今でもはつきり思ひ出す・・・彼はかう獨り言つて其晩の印象をもう一度眼の前に描かうとするやうに眼を閉じた。園村や牧が自分達の「新しい生活を祝福する」かういつて僅かの小使ひの内から幾何か宛つを醵金して呉れて、其金で峠の茶屋かち黴臭い晒あんや、黑砂糖を買ひ集めて來て、牧の發案で三本の竹を編んだものに繩をつるして、それに大きな鍋をかけたのだつた。水は五少年が裏の水路から幾度か汲んで來た。笹や、榾の火は鍋の下で赤く燃えた。甘いものが唯一つの慰めであるやうな連中の、しる粉の啜り力は實際、文字通りの鯨飲だ。其うちに圓坐を作つた皆はトランプを始めたのだつた、さうだ、あの時僕の隣に千鶴子、其次に角田、三輪、牧、園村それが全く不用意のうちに作られた順序ではあつたが、あれから後の自分の心は全く平靜を失つてしまつた。千鶴子と、角田との、どんな微細な擧動でも見逃すまいとする、視線は絶へず敏捷に二人の上に働いた。全體此小屋は急塲の思ひつきで併も、牧や、園村や、角田のやうな素人が自分達のために、直してくれて、辛じて人が住みうるやうになつたのだから、不完全な根太・・・といつても天井と同じい青竹を編んだものゝ上に古疊を敷

いたものだつたから、彼女の體は、ともすれば角田の方へ滑る、それを彼女が意識してするのではないことは解り切つてゐるのだ、それだのに殆ど心の平衡を失つてゐる自分の注意力は病的にまで近くなつに來る。恰度、其時千鶴子の右足の親指は角田の左の足の指に觸れたのだ。その瞬間嫉妬に燃えた自分の眼光は、露骨に妻の上に注がれた。野獸のやうなその眼光に振るへ上つた千鶴子は、直に居ずまいを直すのだつた、がものゝ五分も經つたら彼女の體は再び角田に向つて滑りよるのだ。かうなると、僕の心はトランプにもお汁粉にも、牧達の上げる高い笑聲にも其場の一切のものに興味を失つて了ふのだ。十時近く皆は歸つて行つた。僕はどんなに制しても、制し切れないのは底知れない嫉妬から來る不滿と、苛立ちと、怒りだ。自づと「僕の前で餘りみつともないシーンを見せて呉れるな。」彼女を苦しめるとは知りながらこんな皮肉が口を衝いて出る。

「また初つた、あなたはもう私に幾度そんなことで氣不味い思ひをさせるやうなことをしないつてお誓ひなすつたの、全體私が何をしたつておつしやるの。」かういふ彼女をぐつと睨みつけて、

「自ばつくれるな。」賤しい笑ひの口許に涌き上るのを意識しながら言ひつゞける。

「大分樂しそうだつたぢやあないか、だが角田だから可いが、牧のやうな潔癖家は處女でない女に體を觸れられると非常に侮辱を感ずるかも知れないよ。」「まああなたはよくそんなことが言へるのね、あの疊がどんなに滑べるかつてことを自分で坐つて見て下すつたらどう：：」かうした會話の後に、とう／＼自分の感情は爆發した。自分の最初の一擊が、彼女の右の頰に注がれたと思つた瞬間、彼女の精神は既にあの海岸の住居で幾度か脅やかされたやうな錯亂狀態にあつたのだ。喚き、泣き、母親の名を連呼しつ。惡魔の追擊から逃れようとして懸命にもがく、自分は傷ましい彼女の發作を、恐ろしい火焰の燃え擴つて行くのを眺めるやうな、おど／＼しさで眺める。あの時自分は、此ま〻彼女の精神が平靜に復するやうなことがなく、眞物の精神病者になり了せたとしたら、自分は一生骸のやうな彼女の守をして過ごさなければならないのだ——何といふ恐ろしいことだ：：。かう思つて飛びついて抱きか〻へようとする自分の手からずるりと逃れた彼女は急拵ひのシーツのカーテンを拔けて月の庭に出た。可成り夜は更けてゐた。青白い月光の中に立ち昇る河霧は巨人の帶のやうに深い鉛

紫のベールを被いで眠つてゐる重疊たる山山の中腹を流れてゐる。小丸河の清流に圍まれた丘の上の深夜、更けてゆく夜空に反響する阿鳴の外、一切のものは深い神祕と沈默との裡に眠つてゐる。彼女の後を追つて小屋を轉がり出た自分の眼に甘藷畑を突切つて水源地の方面へ走つて行く彼女の姿がぼんやりと映つた。幾度か甘藷の蔓に足を取られて、漸う自分は彼女に追ひついたのだつた。そして引づるやうにして此小屋の中へ連れ戻した時：：其時こそ自分は再びかうした場面を繰返すまいと心に誓つたのだ：：それから數日間を、自分は毎日のやうに多くの住民と共に畑に出たり、燃料を集めたりして過ごしたのだ。朝は、さうだ南國とは言へ十月の朝は手足も凍り果てゐほど冷氣が加つた。褥を離れると直に勞働服に着換へて自分は彼女と共に丘一つ越へた共同住宅へ出かけたのだつた。裏の水路で顏を洗つて食堂へ行きつくと、何時も快活な角田や、牧の顏が其處にあつた。まるで陰府のやうな此小屋から明るい世界に出た彼女が俄に輝やかしい表情に變るのも寧ろ自然ではないか、元氣を取り戻した彼女はお針や、洗濯物に取りかゝる前に圖書室に備へ付けてあるオルガンの前に腰を下ろしたものだ。それから午餐後の小一時間は庭のテニスコートに運動好きの角田や、

牧や、SやKやが集つて来る。女學生時代に級のチャンピオンを以つて許るされてゐたやうな彼女は一たまりもなく誘惑されるのだ。此んな時圖書室の机に凭れて讀書に耽つてゐる自分が、ガラス窓越しに彼女の飛び歩いてゐる樂し氣な樣子を眺めるやうなことがあつたら、煮えくり返るやうな心の勤亂を押し隱して「馬鹿つ、體のことを考へて見るが可い。」と窓口から怒鳴りつけるのだつた。彼女は蒼皇としてラケットを投げ出して悄然と引上げる、それにしてもあの最後の事件を自分が惹き起すやうなことがなかつたら、たとへ村の空氣が彼女に取つて耐え難いものであつたとしても、かう迄早く最後の日が來るのではなかつた。さうだあの日、自分が園村と水源地から小丸川の上流へかけての栗林を晝飯後の二三時間を歩き廻つて、二人の勞働服の前後のポケットに栗の實を溢れるほど詰め込んで共同住宅へ引き上げた時、彼女の姿がもし午前と同じい圖書室に見え出されたとしたら……。あの時彼女は圖書室の次の室にゐたのだ……。二三日前から××社の展覽會に出品する靜物に取り掛つてゐる角田の畫室と圖書室とに挾まれた室にゐたのだ。其處で彼女は針仕事をしてゐた、たゞそれ丈けの事實に對して自分の惡魔的な想像は輪に輪をかけて擴がつて行く。何の爲に彼女が

彼の隣室に仕事場を替へる必要があらう。果して其夜泣き乍ら自分に辯解したやうに圖書室を掃除した爲めだらうか、或はそれがほんとうかも知れない。それが事實でないと如何うして言ひ得よう。だが懷疑深い自分の心は其處に何等かの疑惑を挿ばまないではゐられないのだ……戀するものゝみが能く感じうる牽引力に依つて、彼の隣室に移つて行つたのだ……と。そして若し彼女が如何に爭ひ難き證據を示して此事實を否定した處で、自分の享けた感じの萬分の一をも消滅させることは不可能なのだ。そして又自分は何んといふ馬鹿氣だ兒戲にも類したことを思ひ付いたものだ……あの時自分の頭の構造は確に狂つてゐたに違ひない。其狂つた頭にヒョックリ浮んだのがKの顔だ。あの物好きな、ドラマチックな名文家のK、自分はあの時かう思ひ乍ら坂を上り始めた時、折よく刈込んだ秣の籠を背負つて、向ふから下つて來る彼に出會したのだ……それで自分は思ひ切つてあのことをKに頼んだのだつた。彼は「よしかういふ條件の下に引受けよう。僕の名譽の爲に、此事に僕が關與したといふことを、永久に君が絕對の祕密を守るといふ。」あの日夜に入ると強い風が出た。加之雨さへ加つて丘の上の一軒家は今にも吹き倒されさうな狀態だつた。一日の仕事を終へて自分が妻と

共にこの小屋へ戻つた時、「千鶴子、服のボタンが取れた。付けて呉れ。」何氣なくかう云つて突き出した自分の手から勞働服を彼女は從順に受け取つた、哀れな妻よ、お前は瞬間後に自分が其ボタンを附ける爲に取り出す針箱の中にどんな芝居が仕組まれてゐるか、少しも知らずにゐるのだ。心の裡にかうつぶやきながら彼女の一擧手、一投足に注意深い視線を放ける此時、手許に引き寄せた針箱の中から、案の條彼女は一通の手紙を發見した。「誰れだらう」かう輕い驚愕を見せて封書の文字を見た「今だ」自分は心に叫んで態と氣付かないやうな態度を裝ひ乍ら彼女の表情にそれとなく注意する。「誰れだらう。」もう一度彼女は獨り言つて封を切つた。二三行讀み下したと思ふと、「馬鹿にしてゐるわ。」彼女は憤然として立ち上つた。そして彼女は其手紙を引掴むやうにして外へ出ようとした。「何處へ行くんだ。」自分は矢庭に飛びついて彼女を引捉へた。

「放して下さい……私、園村さんに言つて來るの、村の住民の中にこんな失敬な奴がゐるとしたら、園村さんに話して村を出て貰ふわ、え、失敬だわ、他人の妻に對して此んな手紙を送るなんて。」かう言ひ乍ら彼女は自分の捉へた手を振り切るようにして横しぶきの雨の中に

飛び出した。

「おい馬鹿。」かう怒鳴り乍ら續いて飛び出した自分が彼女の後を漸う追ひつめたのは、水路へ突切る高粱畑の前であつた。

「惡かつた……僕が書いたんだ、千鶴子。」かう憐みを乞ふものゝ如に言つて、漸う小屋の中に濡れ雫になつてゐる彼女を連れ戻したのだつた。

「えゝ嘘です、あなたの字とは違ひますわ。」彼女は言下に自分の言葉を否定したのであつただがそれと同時に、筆者が角田でなく自分の劃策になる、何人かの書いたものだといふことを感知したのは事實だ。あの晩彼女は恐ろくし發熱した。夜の更くる迄惡感を訴へた。「夜が明けたら東京へ返して下さい。」「是以上私を苦しめないで下さい。」かう言つて彼女は執拗に自分を苦しめた。近くに人家のない丘の上の一軒家で、併も此恐ろしい風雨の眞夜中、自分は如何とも施す可き術を知らなかつた。風雨は益々荒れ狂ふ。雨戸のない小窓の簾は時折吹き捲くられて雨の飛沫は褥の上に迄吹きつけるのだ。暫時して彼女は輕い鼾の音を立てた。熱の高い彼女の傍に横になつた自分が睡りに陷ちて、凡そ一二時間を經過したと思はれる頃だ

つた。窓のの外にパサリと物の落ちる音に睡りを醒まされた。時計がないので確固としたことは判らなかつたが、既に十二時を過ぎてゐるやうに思はれた。自分は耳を澄した。確かに窓の外に人の氣勢がするのだ。自分はガバと刎ね起きて、簾を捲つた。外は暗い。風雨は依然として荒れ狂つてゐる。其時自分は闇の中に黒いものの突立つてゐるのを認めた。

「何方。」自分は誰何した。

「僕だ……多分君が窓を此まゝにして寢てゐるだらうと思つて見に來た。第一千鶴さんの體に直接冷氣を當てるとよくない。」園村はかう言つて抱いて來た幾枚かの莚を窓の外に張り廻して呉れたのだつた。

「有りがたう、こんなに雨の降るのに。」自分は恐縮してかういつたのだつた。

「千鶴子。」かう自分は彼女をも呼び起して園村の厚意を謝さうと思つた。

「いや、眠つてゐるのを起さない方が可い。」寢卷の上にマントを纏つた園村はかういつて窓から小屋の中を覗いた。

「先刻千鶴子が少し熱が出て。」ぎくりつとした自分はかう何氣なく言つた。

「大切にしたまい……お休み。」やがて園村の足音は雨の中に消えた、あれから二日程、引續いて彼女の熱は高度に上つたのだ。と哲郎は思ひ續けた。だが誰が彼女の發熱があの夜、自分の惹き起した事件に原因してゐると思ふものがあらう。園村や、牧や、角田は全く自分のことのやうに心配して呉れた。不完全な掘立小屋なので弱い體に濕氣を享けたのだ、と誰も彼もが思つた。彼女は「再び生きてあの山を越へることは能きない。」といつて泣いた。彼女の熱の漸う低下したのを見て、園村や牧に勸められるまゝに此處から三里山路を越へた高城にあるA病院へ出かけたのは……さうだ一昨日のことだ。勿論其時、あれが自分と彼女とが城に住む最後の時に成らうとは思ひ設けないことであつた。渡船場まで皆は送つて呉れた。彼女と二人であの山路を攀ぢ上り乍ら、自分はどんなに、もう暫らく彼女に村に止まるやうに說き勸めたらう。然し遂ひに彼女は肯んじなかつた。醫師は肋膜の痕と、心臟とが幾分惡いと言つた。勿論、姙娠の徵候をも認めると言つた。村の定宿になつてゐるF旅館の二階で一先づ休むことにした。如何しても東京へ歸り度いと言ふ彼女を二階に殘して、自分があの旅館を出る時、彼女は自分を見まいと努めるかの如に顏の上に兩手を置いた。自分は階下へ

下りて宿の主婦に彼女が病氣であること、彼女を一人殘して自分は村へ歸らなければならないことを告げて、其處を立つた。自分の體が村に近づくことを意識するに從つて、自分の心は重苦しい悲しみの底に沈潛して行つた。腹の底に力の拔けたものゝやうに、小さな石の露出にも躓いた。慓然と東京の土を踏むことの不安、村を去る悲しみ、とは言へ村に牧と、園村とが居ないとしたら、恐らく自分は一日と雖ども、止まるやうなことはないであらう。又東京の土を踏むことにも多少の不安が伴ふとしても、さうしたことを思ひ煩ふ餘裕がどうしてあらう。何んのために、今に至つて斯くまで思ひ惑はなければならないのだ、自分には永遠に變ることのない愛情を捧げ切つてゐる妻が、生命の泉が、心の宿がある……それだのに僅か二人の友より持たない村にかうまで愛着を覺えると言ふのは一體是れはどうしたことだ恁う思ひ乍ら自分はとう〳〵あの村の一畔の裡に集る坂の中腹に來た。光りの前に立つ罪人のやうに自分はどうしても眞正面に村を見下ろすことは能きなかつた。共同住宅の庭を視た白い勞働服を着た誰れかの姿が認められた。牧かしらと思つた、河に臨んだ園村の家を視た自分の體はあの時、園村の家を横から見得るやうな位置にまで運ばれてゐた。自分の視線が

園村の家に走つた時、書齋の窓の所に立つてゐる三四人の姿が認められた。牧と、角田と、三輪とそして園村とだ……角田が逸早く自分を認めた。帽子を高く振つた。自分もそれに應じた。何故か力が拔けて義務的な振り方をした。皆が待つてゐるのだと思ふと自分は目の中に熱いものが溢れて來るのを感じた。本村の女將さん達が道下の田に豐穣に實つた稻を刈つてゐた。自分は帽を眞深に被つた。次の瞬間に昂奮が羞恥に勝つた。自分は泣き乍ら區長の家の前の小徑をまるで蹌踉けるように走り下つた。丁度其時だつた。……自分の體が船付場の砂の上に立つた時だ、淡碧に澄んだ流れに例の淺黄色のブク〳〵した勞働服に灰色がかつた帽子を被つた園村が水を搔きながら船を自分の方へ滑らして來るのを見た。次の瞬間、自分の體は打ちのめされたやうに船つなぎの石につつぷしになつてゐたのだ。自分は泣いた。とは言へそれは悲しみでもなく又喜び、感謝、其何れでもなく、それは感情の頂點に於てのみ經驗しうる不思議な恍惚狀態の一ッであつた。極めて自然に溢れ出る涙は刻々自分の靈魂を潤ほして行くのを感じた。

「如何したの……淺香君……。」其時園村は岸に船をつけて自分の乘り込むのを待つてゐた。

自分は船に乗り移つた。そして船尾に腰を下ろした。

「如何したの、千鶴さんが偉い悪いかな！。」かう園村は氣遣はしげに訊いた。園村は再び水を掻き初めた。船は彼岸についた。園村は突出した岩の間に棹を突つ込んで船の流れないようにした。

「案じて待つてゐた・・・千鶴さんが悪いの。」園村は自分の答へを促すやうに言つた。

「淳さん・・・それよりもつと恐ろしいことになつたんです。・・・淳さんと僕とが別れる時に」・・・自分は漸うこれだけ言ふことが出來た。

「如何したつて云ふの！。」園村はかう言つて、自分の泣きじやくるのと、殆ど呼吸を合せるやうにフウ〳〵と首肯くのだつた。

「淳さん・・・今、僕は何も言ひたくありません・・・どうぞ聞かないで下さい、そうすることが可いことか悪いことか知りませんが・・・僕は村を出ることに決心したんです・・・醫師は千鶴子は心臓が少し悪いだけで、外に別に悪いとは言はなかつた・・・。」と自分は言つた。

「それで何時立つことにするの・・・兎に角牧君とも相談して見よう。」園村は言つた。

「たゞ僕の悲しいのは、どんなに親しいもの同志でも、遠くに離れてゐれば自然と距離が出來る・・・それが僕には耐えられないんです。」

「それはさうだ、だが君も一人の時とは違ふ・・・何處までも一緒に生きて行く譯には行かない。僕にした處で今までの惰性と、まあどんな仕事にも必要なのは緣の下の力持ちだ・・・僕はその覺悟で行ける處まで行つて見ようといふ氣持で止まつてゐる、とにかく僕の家へ行かう。」園村はかう言つて先きに立つて船を捨てた。それから、園村の家で遲くまで牧や、角田や、三輪にも集つて貰つて、語り合つたのだ・・・そして妻驛まで四人が送つに呉れると言ふこと、場合によつては驛前の旅館で最後の一夜を送らうといふこと・・・。

自分が園村の家を辭したのは夜も餘程更けてからであつた。共同住宅の前で牧や角田と別れて獨り小屋へ引き返した自分は、暗闇の中でよう〳〵探がし出したランプに灯を燈して、それから褥をのべて、其中にもぐつたのだ。遲くまで叢の中で鳴く蟲の音が耳に付いた。いろんな小蟲が灯を慕つて飛んで來ては燒けて落ちた。村は恰度此ランプの灯のやうなものだと自分は其時沁々思つたのであつた。

長い追想から返つた時、太陽は餘程高く昇つて居た。彼は褥を蹴つて立ち上つた、それから顔を洗ふ爲に小屋を出た。水路へ通ずる小路の草の上には霜が白く光つてゐた。哲郎が水路から引き返して來た時、すつかり旅仕度の調つた角田と、三輪とが坂を上つて來るのに逢つた。

「早いな、今日は草鞋穿きかい……。」哲郎がほゝ笑み乍ら言つた。

「荷物はどの位あるの、五人だから五つに分け給へ！。」と角田が言つた。何時もなら本村の馬子に頼むのを、皆が分擔して妻驛まで運ばうと言ふのは、成可く費用を省いて乏しい哲郎夫妻の旅費に加へやうと云ふ皆の心遣ひからであつた。

二人は哲郎の後に從いて小屋の中に入つた。彼は先づ着物や、洋服のやうなものを行李の中に收めた。書籍は大きな袋に、寢具は二つに分けて毛布に、かうしてそれ〴〵纏めてみると小屋の中は變にガランとして物寂しい感じを起させる。牧と、園村が其處へ集つて來た。何づれも一筋づつ麻繩を手にしてゐた。

「淺香君は荷が少ないから樂だ。」と牧が言つた。

「僕のやうな旅人は是れでも荷が多すぎる。」と哲郎が笑顔で答へた。

「淺香君は未だ飯を食はないだらう、お晝の握飯があるから……。」かういつて園村は風呂敷包を取出した。

「では一つよばれようか、村の握りめしも食ひ納めだ……。」哲郎はかういつて風呂敷の中から取り出して齧むすびを嚙り初めた。

「淺香君のゐた後を僕等の晝室にしようか。」此時、角田が園村を顧みた。五人は荷物を背負つた。哲郎は戸外へ出る時もう一度小屋の中を眺め廻した。牧の作つて呉れた荒削りの机だけが其處に殘つてゐた。

渡船場へ出る前に哲郎は共同住宅へ寄つて多くの住民達に別離を告げた。そして又仙子や多津子の長く住つてゐた馬小屋の二階にも……。

共同住宅の前の花園にはコスモスの花が朝の風に搖られゐた。「城」は今が萩の盛りであつた。園村の細君も子供を連れて同じに郷里の方から旅を續けて來た青年を送る爲めに渡船場まで重い體を運んだ。棹は三輪が持つた。船は水の上を滑つた。五人は船を捨てた。哲郎は

顔馴染になつてゐる峠の茶屋の老爺の許にも寄つて名殘りを惜んだ。此時、哲郎は園村との一年近く續いて來た温かい交友の日を思ひ返して見た。そして今別れようとする最後の日に至つて尙親しい友の前に曝け出すことの能きないやうな傷しい自分の心の内部の光影を限りなく淺ましいものに思つた。

「淳さん・・・・僕は今あなたを裏切らうとしてゐる。本當に僕は、あなたの前で鞭打たれても足蹴にされても足りない人間だ・・・・それだのにあなたは、何といふ底知れない愛を示して呉れるのです、だがもう暫く待つて下さい。何もかも明瞭になる時が來るんです、そして又角田君も・・・・」彼はかう心の裡に言ひながら殿を打つた。峠にかゝるに從つて園村も牧も快活な角田迄沈默に陷ちて行つた。時折三輪の輕い反語や節崩れの小唄が交らなかつたなら恐らく四人の口は永久に綻びる時が來ないやうにさへ思へた。哲郎は坂の頂上に來た時、振り返つて「城」の丘を見下ろした。朝の陽は共同住宅のガラス窓に碎けた。緣に立つて誰かゞ手を振つてゐる。丘の上の掘立小屋は青い甘藷畑の中に、草の生へた屋根だけが指摘された。此時哲郎の頭に、彼と同じいやうに「城」の地を慕ひ集り、そして此丘の上で生活し、又彼と同じ

いやうに此山道を登つて行つたまゝ返らなくなつた、西岡や、村上や、宮津や、仙子や、懐しい多くの友の姿が分明と浮んで來た。と其時今朝見たあの凄慘な夢の場面が何んの連絡もなく彼の頭を掠めた。

白い雲は朝靄に包まれた遠い山の上に流れつゝあつた。(終)

9/6 TH.
AKOUTOKO

靜かなる朝

千九百二十一年九月

「何といふ無責任さだ！。」健作はH病院の玄關口の三和土を腹立しげに蹴つて、轉がるやうに西小川町の街路へ出た。眞夏に入らうとする日の、正午下りの太陽は蒼白く昂奮した彼の顏にかつと照りつけた。彼の顏は急に熱して、蒼黑く一際の凄味をさへ呈した。血走つた彼の双眼の膜の中を、額から流れ落ちる汗がぬら〳〵と霑した。「醫者迄が共謀になつてゐるのだ！。」もう一度彼は誰に言ふともなく、嚙みつくやうに叫んだ。そして駈け出した。彼は危ふく、向ふから走つて來る自轉車ボーイに打突らうとした。が、其都度彼は辛じて身を翻はした。彼の帽子も被らず、ワイシャツもネクタイもなしで、上着を引かけてゐる風姿は、どう見ても狂人だつた。路傍の人も並外れた彼の風采に好奇の瞳を瞳つた。と此時彼の頭にい

やに陰氣臭ひ、ある病院の長い樓下の場面が映つて來た。青ぶくれの心臟病患者の顏や、腕を白い布で胸から肩へ吊した外科患者の顏やが往つたり、來たりしてゐる光景がである。健作が產後の肥立の惡い妻を伴つて、神田橋近くの其施療所の門を潛つたのは一昨日の午後であつた。其處の內科と記された診察所で受持の醫員から一通り診て貰つて、其時控室に待つてゐた健作の許へ歸つて來た時の、妻の兩眼に一杯に溜つた涙の今にも零れ落ちさうな、哀れつぽい顏が又しても彼の眼の前を掠めた。

「あなたが一度醫員の方に會つた上でよく訊いて下さると心强いんですがね、でないと何んだか私安心能きないんですもの。」こんなことを言つてぐつたりと傍の椅子に腰を下ろした。

「でも何んとか言つたらう、何處が惡いとかつて。」

「えゝ何でも肺尖に、腹膜に、心臟に、それから肋膜の痕がまだ治つてないんですつて、それで田舍か、海岸へ轉地した方が好いつて言ふのよ、そしてもう一人の醫員と顏を見合せてクス〳〵笑つてゐるのよ。」

「腹膜に、肺尖に、心臟に、肋膜に、冗談じやないね、病氣の問屋じやあるまいし。」

かう健作は苦笑しながら內科の診察室へ入つて行つた。其處の汚れた診察臺の上に仰向けになつた勞働者風の男を打診してゐた、四十格好の貧相な醫員に彼女の容態を訊ねると、矢張り彼女の言つた四つの病名を數へたのであつた。そして赤坊に母乳を絕對に呑せては不可ないといふ注意をも付け足した。

腹部の塗布藥と、水藥とを貰つて診療所の門を出て、××公使館裏の長い板塀の處まで、二人共眤つと押し默つて。お互に心に藏してゐる、恐ろしく危險なもの〻爆發を氣遣ひながら、そして成可くそれに觸れまいと力めながら歩いたのだつた、醫員の數へた四つの病名が一つ一つ檢する時、たとへ致命的なものでないにしても、彼女の脆弱な肉體は、その四種の疾患を一時に支へ切れるものとは思へなかつた。此場合轉地といふ方法が最も優れたものであつたとしても、差當つての藥價すら仕拂ふことの不可能である彼であつた。

「妻は死ぬかも知れない。一瞬の間も忘れたことのないほど愛し切つてゐる淳一をも自分の手に殘して、是が遠い西の國迄自分の事業を助ける爲に走つて來て、暴君のやうな自分の一年近い月日の間の、從順なる僕であり、母でもあつた彼女の受ける正しい報酬だらうか、」彼

はかう思つて立止つて、背後から引きづるやうな歩調で蹤いて來る妻を振返つて見た。其處は大きな葉を擴げた碧梧桐の葉影になつてゐた。

「お前歩けるかい……。」かう勞はるやうに言つて、彼は妻の痩せ細つた手を不氣味なもの、如に輕く握つて見た。妻は洋傘を杖にして、左の手を健作の肩に置いた。

「私、もう駄目なんだわね。」

「莫迦な、そんなことがあつて堪るものか。」彼は力强く否定した。そして又歩き出した。が其時、彼は妻の恢復を信じてはゐなかつた。が、もう一度彼は死力を盡して彼女を以前の健康體に復さうと心に誓つた。彼は其の爲めに非常に大膽になつた。彼はS氏といふ先輩に宛て、窮狀を訴へて、合力を得たいといふ手紙をも書いた。そして彼女に關する一切のことに他人の手を煩さなかつた。彼女の病氣に就いて必要なもの、たとへば氷嚢だとか、搾乳器だとか、檢温器だとか、彼の力で支辨することの不可能なものまで、顏馴染になつてゐる表の藥品屋から取り寄せた。二日經つた。彼女の容態は急變した。彼女は全身に非常な痙攣を引き起した。唇は紫色に變つた。兩足は死人のやうに冷却した。體温は四十度を越へた。妻の

母親は大急ぎで芥子を水で溶いて病人の足の裏に貼りつけたり、表の氷屋からブッカキを買つて來たりした。赤坊は弟の米吉の手に抱かれて、馴染の薄い哺乳器の乳首を吸はなければならなかつた。健作は表に飛び出した。醫者を迎へに行く爲めであつた。西小川町から、神保町へかけて三四軒の醫院の扉を叩いたのだが、折惡しく不在であつたり、手が塞つてゐたりした。H病院は其附近でも著名な病院だつた。其處では奥に聞きに行つた取次の看護婦の十分近くも顏を出さないのに腹を立てゝ、そのまゝ表へ飛び出したのだつた。

健作は西小川町の角の交番の前まで走つて來た時、立ち止つて箱の中を覗いた。警官に醫院の心當りを訊く爲めであつた。箱の中に警官は椅子に腰を下ろしたまゝ、時折街路へ退屈な瞳を放げてゐた。

「醫者は在りませんかしら、内科の、病人が非常に惡いんです。」健作がかう出し抜けに言つて近寄つて行つた時、警官は、大きなあくびを一ッ嚙み潰した。そして、

「君は何處に住んでゐるんです、職業は、誰が惡いです、」健作の取り亂した服裝から何か嗅ぎ出さうとするやうに鼻をうごめかした。

「醫者は在りませんか、病院でも好いんです。」

彼は急き立つて苛々した。

「誰が悪いんです、君はこの近くに住んでゐるんですか・・・。」聲官は繰返した。

「もう宜しい・・・・。」健作は到頭腹を立てた。血がぐつと頭に上つて來るのを感じた。彼は駈け出した。神保町の電車通りの方へである。

清心堂醫院！　右側の通りから僅か入つた所に吊された此看板を見出した時、彼は救はれたやうに思つた。彼は入つて行て、扉を押した。玄關口から、見透かされるやうになつてゐる診察所に、其日の新聞を讀んでゐた。若い、艶の佳い顔色の、頭髪を綺麗に分けた醫員は、一通り彼の來意を聞いた後ち「それでは、ご一緒に伺ひませう。」と答へた。暫らくして、白パナマの帽子を被つた醫者が彼の前に現れた。健作は途々病人を一昨日××診療所に伴れて行つたこと、それから其處の醫員の奬めた轉地說など事細かに說明した。家に入る時、彼は

「お醫者さんだよ・・・・。」と褥の上の妻に注意した。

勝手で氷を碎いてゐた母親が手を拭き拭き出て來た。病人は輕く肯首いて、血の上つた顏に感謝の色を表した。醫者は病人に近づいた。最初に體温を見た。それから聽診器をあてた。腹部を診た。そして診察の全く終つた時、醫者は病人から少し離れて、

「もう少しで。」と言つた。

「人を一人殺す所でした・・・・。」眞面目な取り澄した顏を健作に向けた。

「轉地なんて飛んでもないことです、一昨日××診療所にいらつしやつた丈けでも大打擊です。」其時母親の運んで來た洗面器に手を浸しながら醫者は嘲笑ふやうに言つた。

「助かりませうか？。」病人は泣き聲になつた。

「大丈夫ですとも。」醫者は自信ありげに答へた。

「然し、腹膜が進んでゐなさるから、暫く絕對安靜です、自家血淸注射なら早いのですが、如何です、血を少し取りますか、ほんの一寸で良いんですよ。」醫者は笑ひながら、老人が子供をすかす時のやうな態度で、病人の心を動かさうと努めた。病人は初めは强硬に拒んだ、が結局、必らず癒ると云ふ條件でそれを承諾した。醫者は明日の往診の時に其用意をして來る

と言つて歸つて行つた。送りに出た健作の耳に今夜にも、もう一度容態が變れば危險だといふ注意を囁くのを忘れなかつた。

健作は××診療所の醫員の無責任を限りなく腹立てた。併も昨日診察を受けた時、クスクス笑つたといふ妻の言葉を思ひ返へして、それが明らかに誤診ではなくて、彼等は何も、彼も知つてゐたのだと思つた。そしてそれは、殆ど致命的な重患に陷つてゐるにも拘らず、無謀にも俥にも乘らずに診察を乞ひに出かけた、自分たち夫婦の、病氣に關する無知を嘲笑つたのに外らないのだと思つた。併も親切らしく轉地を奬めて病人を廻避しやうとしたのは、彼等の無責任を二重にするものだと思つた。そして此事は彼等の良心か何れほど習慣に依つて痲痺してゐるかを十分に證豫立てゝゐるとも思つた。加之其診療所がある新社會の建設を理想とする一部の××主義者の經營になるものだと思ひ到つた時健作は何かのカリケチアを想像しないではゐられなかつた。注意を受けた第一夜は、妻の容態は殆ど平穩に過ぎた。彼女は絶へずうと〳〵と眠りと現との間を往來してゐた。健作は徹夜して間斷なく腹部の氷嚢を取り換へた。赤坊は病人の傍らに寢かされて小さな鼾を立てた。妻は眞夜中に時折、ぱつ

ちりと大きく眼をみひらくことがあつた。そんな時枕許にぽつねんと坐つてゐる彼の手を輕く、おもちやか何かのやうに握つて、

「あなたに苦勞ばかり掛けるわね、私弱いものですから……。」こんなことを言ふのであつたそして又間を置いて、

「淳ちやんわ！。」かう言つて赤坊の寢顔を覗くやうにして、

「あなた私癒るかしら、死ぬやうなこと無いわね。」

「そんなこといふと癒らないよ、病氣は一つは信仰で癒るんだから。」

と彼女は又思ひ出したやうに、

「仙さんが此頃ちつとも來ないわね。」かう健作の女友のことを言つた。

「仙さんは入院してゐるんだらう。手術を受けるんだから。」

「あなた私死んだら、淳一と二人切りで暮して行けて？　でも仙さんと一緒になるやうなことはないでしよ。」

「莫迦だねお前は。」かう窘めるやう言つた健作は、是が日頃嫉妬らしいことを、おくびにも

出したことのない妻の言葉であるだけ、それだけ彼には意外にも、又可憐くも思はれるのであつた。暫らくの間、薄い紅絹の布で被つた電燈の光りの中に、凄いほどげつそりと肉が落ちて、とげとげしく見える妻の顏を、眤つと瞶めてゐた健作は、瞬間衝動的に自分の顏を熱臭い妻の頰に押しつけるやうにして、泪の一杯溜つた兩の瞼を、美味しい西洋果物の汁でも吸ひ取るやうにぺろりと舌の尖きで舐めてやつた。

二

「あの頃。」と健作は心に强い自責を感じて言つた。「だが！。」彼は强くそれを否定するやうに叫んだ。「僕は貧しかつたのだ、たとへあの頃の彼女の生活に無理があつたとしても。」

健作の妻は其年の五月産をした。其頃彼等は小石川音羽八丁目のある荒物店の二階に間借してゐに。彼は其處から日本橋の××書店の雜誌編輯所に通つてゐた。極めて薄給だつた。其二階は彼夫妻の、都市生活のきつかけともいふべき、九世山の上の生活が全く行き詰つた

時、偶然に見出した假住居だつた、夕方散歩の歸りに其二階を見付けて來た時、

「五十圓の敷金が浮く譯だからね、お前が少しの不便さへ忍んで呉れたら。」と健作妻に向つて言つた。

「だけど二階でお產をするのは大變ですわ。」容易に肯んじない妻を、「都會に於ける敷金の要らない借家法は間借り以外にないこと、不便や、屈辱は一時的のものであること。」を說いて漸う承諾させたのだつた。其二階で彼女は初めて產をしたのだ。凡てが不完全の間に行はれた。

五月初旬のある日であつた。夕飯を濟して、一時間近く經つた頃妻が俄に腹痛を訴へ出した。最も一番最後に診察を受けた時、三十日か一日と產婆の言つた豫定日はもうとうに過ぎてゐるのであつたから、或は產氣づいたのかも知れないと健作は思はないでもなかつたが、父となるといふ感じが、何うもピッタリと頭に來ない健作は、此出產といふ事實が是ほど近く迫つてゐるのにも拘らず、一方全く有り得べからざることのやうに考へられてゐるのであつた。然し、事實は嚴然と刻々彼の前に迫つて來るやうに見えた。傍の疊の上に突伏しにな

つて、痛苦を忍んでゐた妻は、其時机に向つて創作の筆を執つてゐる健作の手を持つて、自分の腰の邊りを押さへさせた。

「此處、えゝ其處よ、もつとぐつと押へて頂戴。」

かう言つて顔を顰め、口をふくらませて、自分でも下腹部を兩手にぐつと力を罩めて押へた。それにしても成可くならば、宵の中に、凡てのことが終つて欲しいと健作は心の裡に願つたのである。一寸の出入りにも階下の人の神經に觸れまいと、氣を遣はなければならない二階住居で、若し深夜にでも及ばうものなら餘りに慘めであつた。産婆を呼びに行くにしても、彼女の母親の許へ電話を掛けるにしても、其都度裏の木度の開け閉て、階段の上り下り凡ての動作に細心な注意を以つて當らなければならなかつた。

とにかく健作は、四疊の方に褥を取つて妻の體を運ぶようにして、寢かしてやつた。痛みは間歇的に十分間位間を隔いて來た。

「痛い……痛い、あなた……エゝ其處を押へて……もつと！。」健作は時折襲つてくる睡魔を追拂ふやうにして、彼女の腰部から下腹部へかけてを押さへ押さへした。

十一時を過ぎた頃であつた。急に彼女の容態が變つたと健作には思へた。著しく呼吸が迫つて來た。心臟が波打つて髮の毛の亂れた頰には、薄く血が上つてゐるのであつた。痛苦を訴へる聲も、先刻ほど高くはなく、たゞ唸るやうに微かに唇を泄れた。

「若しか？。」かう思つて、彼は衝動的に立ち上つたのであつた。

「お前、しつかりしてね、少し耐へておいで、急いでお産婆さんを迎へに言つて來るからね！。」妻は肯首いて見せた。足音を忍ばせて階下へ下りた健作は、裏木戸を開けて表の通りへ出ると、驀地に江戸川の停留所近くの産婆の家に駈けつけた。彼は直ぐにお後からといふ産婆の返事を齎らして引返して來て、二階に上つて見ると、矢張り嚴肅な緊張した場面が其處に在つた。先刻、長い陣痛の苦みに疲れ切つて、根こそぎ力といふものが拔け失せたやうに見えた彼女は、其時、もう一度勇猛心を振るひ起して、一つ大きく呻いて健作の體に確りと抱きついた。十分、廿分、手古摺り切つた健作は、街路に面した窓を開けて、産婆を待つことに苛立つた。寂然として眠つてゐる兩側の建物に反響する下駄の音の一ッ一ッにも注意を拂つた。彼は、其凡てに裏切られた。

「馬鹿な奴だつ！　無責な奴だ。」健作はいらつく感情を吐き出すやうに言ひ言ひした。それから産婆の來たのは小一時間の後であつた。産婆は好人物らしい女だつた。妻から容態を聽き取つた後、腹部を診て、産期の近づいたことを告げた。彼女は白い仕事着を着けて、藥品や便器の用意をした。健作は恐ろしく嚴肅な瞬間が近づいて來ることを感じた。が、とう〳〵黎明迄彼女の同じいやうな狀態が續いた。そして健作は妻の分娩する刹那の苦みと、狀態とを知らなかつた。何故なら、彼は其時妻の母親の許へ電話を掛ける爲に自働電話迄行つた留守であつたから。だが其時、彼女が何れほどの苦痛を經驗したかといふことは、彼女の足を當ててゐた壁土が二尺ほどの間崩れ落ちてゐたことと、足部の側の押入の襖の三四尺はひ上つた處迄、彼女の血液の混つた破水の爲に濡れてゐたことに依つて、容易に想像された。二階の上り口で、最初に赤ん坊の泣き聲を聞いた時、健作は異常な昂奮を覺えずにゐられなかつた。産婆は緊張した顏をしてゐた。額には玉のやうな汗がにじんでゐた。彼女は何か汚れたものを形付けてゐた。そして健作を見ると、

「男の赤ちやんですよ。」と言つた。極度の心の疲れから脫け切つてゐないのか、につこりと

もしなかつた。健作は此説明を聽く迄もなく强烈な消毒藥の臭氣のプンとする室の中へ一歩踏み込んだ時、其處の小さな蒲團の上に、不氣味な肉の塊のやうなものが、仰向けて轉がされてゐるのを見た。赤いぶよ〳〵な全身に柔い産毛が密生して、顏は老人のやうに醜く皺が出來てゐた。薄い頭髮は格好の悪い、頭のてつぺんに粘りついてゐた。健作は駈け寄つて行つて、それを本能的に抱き上げやうとした。そして産婆にそれを止められた。

「あつ、赤ちやんに抱き癖が付くと不可ませんよ。」と、妻は想像したよりは平氣な顏をしてゐた。健作を見ると紅らんだ頰に、微笑を浮せて、感謝と、安心とを示した。彼は限りなく妻に愛情を感じた。極度の感激が彼を泪含ませた。彼は彼女の枕許へ近寄つて行つて、其時盥の中の湯加減をしてゐた産婆の方へ背を向けるやうにして、彼女の額に接吻した。

淳一――それは彼夫妻が、其嬰兒の爲に選んだ名であつた。夫婦は初め種々な名を選んで見た。健作の頭字を取らうといふことが二人の間に略定つた時、健作は自分たち二人の結婚に就いて、全く無條件的に骨折つて呉れた園村を思ひ浮べた。

「淳さんの淳の字を取らうかね。」と健作が妻の同意を求めるやうに言つた。

「淳太郎、淳吉、淳平だと淳さんと同じだし何んだか可笑しわ。」

「淳！　好い字だよ！　第一淳さんの友情を紀念する爲にもね、淳！　淳！　とあゝお前淳一が好いよ、ね、さうしよう。」珍らしく燥いで健作は漢和辭林を持ち出して、字義を調べたりした。

妻は月末に褥を離れた。然し、出産の際出血の多量だつた爲めと、普段さう壯健でなかつたためとで、彼女は非常に衰弱して見えた。お七夜の濟んだ四五日は、母親も毎日神田から通つて來て、赤ん坊の爲に湯を使つてやつたり、娘のために粥を炊いたりしたが、そのうち遠いので憶劫になつたかして、三日に一度位より來なくなつた。梅雨に入つて間もない頃で漸う褥を離れたばかりの妻は毎日のおむつ洗ひに追はれてゐた。赤ん坊は一日湯を使はせないで置くと、太股の邊りが一面に赤く爛れて目も常てられなくなるのであつた。それで健作は時折、かんしやくを破裂させなければならをかつた。

「お前のお母さんのやうな人は澤山無いね。他人に對して冷淡なのや、薄情なのは例がある

としても自分の子や孫に對して愛情が起らないといふのは。」と健作は始終言ひ言ひした。

「お前暫らく實家へ行つて居たらどう、僕はバンでも何んでも喰べてゐるから、第一赤ん坊が可愛さうだ、如何にお母さんでも眼の先きにゐたらお湯位使はせて呉れないこともなからう。」

「えゝ、私もその方が好いわ、ほんとうに二階の上り下りが大變なんですもの。」

何時も定つて此處まで話が運ばれるのであつたが、偖てそれから一歩先きへ、實行といふ點になると、何方からともなく、いつの間にか話が消滅して又二三日は過ぎるのであつた。それは、たとへ健作が妻の神田行を建議した處で、實際心の裡で、彼がそれを望んでゐるのでないことは、餘りに彼女には見透いた事實であつたからである。又健作自身もそれ以上話を進めるにしては餘りに過去の記憶が生々しく、且つ悲慘であつた。神田の妻の實家！　其處で經驗した三ヶ月近い時日の思ひ出は、健作に取つて決して快よいものではなかつた。それを心の裡に描く度に、彼の心は嚙まれるやうに痛んだ。其處には眞裸のまゝで引きづり出された一個の無宿者としての自分があつた。足蹴にされて、引ぱつたかれて、尙且クンク

ン鼻を鳴らして、跟いて行かうとする、慘めな捨犬のやうな自分があつた。妻！　それを完全に自分の所有とする爲めには、彼がそれ迄に、彼女の心臓を掴むために拂つた血税だけではまた充分ではなかつた。彼女の母親は、彼に社會的地位と、名譽と、それに附隨する富とを要求した。それが娘を所有すべきものの資格だと信じた。健作は其一つをすら具備してゐなかつた。母親は極度に失望した。健作を一個の掠奪者として眺めない譯には行かなかつた。が事實は、娘の所有權は完全に此無資格者の手に移つてゐたと言へるのであつた。何故なら・・・娘はとつくに心臓を此無資格者の手に渡してゐたから。そればかりではなく、母親が其娘にのみ傳へたと信じた血は、其無資格者の血と混り合つて、今生れ出ようとする一つの獨立した生命をも創造してゐたから・・・是を知つた時、母親は自分の娘の掠奪者は、自分の全生涯に取つて、單なる路傍の邂遇者ではなく、其處に働いてゐる必然的な何物かの力を承認しないではゐられなかつた。が、さう思ふことが、直に健作に對する態度を變へさせるにしては、彼女は餘りに片意地であつた。加之彼女は若くして良人に先き立たれた女に共通なへんに愚痴ぽい性格の所有者であつたから——。出拔けに彼女の家に轉り込んだまゝ、是と

言つて定つた職業もなく、食事の時、機械のやうに食卓へ向ふ外、一日中默りこくつて机に向つてペンを動かしてゐる健作の態度は、母親の神經をいら〳〵させるに充分であつた。彼女の不機嫌は露骨に、時としてひねくれた、當てこすりのやうな形を取つて、健作と、そして妻とに當つて來た。女親だと思つて各自に好きなことを仕てゐるとか、子供が幾人あつても若しかの時の力になる子は一人もないとか、誰は株で何の位る儲けたとか、米が高いとか、自家は陰氣臭くてゐられないとか、そして又彼女は實際家に止つてゐることが極めて稀になつた。二月の初旬に健作は日本橋の××書店の雜誌編輯所に就職した。そして其月の中旬にいよ〳〵健作が新に見出した九世山の高臺の家へ妻と共に引移らうとする時には、母親は急に、一向きな若いものゝすることを危ぶむ親切な老人らしい態度に變つて、今日は佛滅で日が悪いとか、足下から鳥の立つやうに引越さなくても可いとか云つて、強いて一日延させることにした。引越の日は朝早く母親も、妻と共に丘の家へ箒や、馬穴を提げて出かけて行つた、その時から僅か三ヶ月の時日より經つてはゐなかつた。そして今又、たとへ僅かの間でも妻を預けることは自分の受けた屈辱を二重にするものだと健作は思つた。

ある日、健作は出勤前の僅かの時間を盗んで創作の筆を執つてゐた。筆は滑り勝ちだつた彼はいら〳〵した。此頃いつも定つて襲はれる絶望が彼の胸を刺した。赤ん坊がベットの上で眼を醒して劇しく泣いた。彼は其時階下で洗濯をしてゐた妻を呼んだ。妻は容易に上つて來なかつた。もう一度赤ん坊が劇しく泣いた時、彼は机を離れてそれを抱き上げた。そして裏の障子を開けた。水道端に妻の洗濯をしてゐる姿が見出された。

「おい來ないか。」彼はかつとして、聲を荒く叫んだ。赤ん坊は續けざまに泣き喚めいた。彼は室の中を歩き廻つた。自分の仕事が頭の中で滅茶苦茶に打ち壞されて行くやうに感じた。彼は泣き出しさうになつた。洗濯物を抱いて妻が氣だるさうに上つて來た。それで彼のかんしやくは破裂した。

「馬鹿つ！。」彼は怒鳴つた。

妻はいきなり健作に飛びついた。

「私が抱きますわ！。」彼女は赤ん坊を健作の手から奪つた。

「子供を五月蠅がるつてあやりしない、あなたはちつとも子供に愛なんか起らないのね。」

健作は默つた。そして机の前に返つた。赤ん坊は母親の乳房を咥むことによつて泣き止んだ。

「あなたは。」と妻は續けた。

「仕事さへしてゐらつしやれば可いのね、私や淳一はどんなに體が悪くなつても！。」

健作は悲みがじつと心を嚙むのを感じた。永久に理會しあひない二人の心の内部の光景を彼は心の眼で見たからである。

「お前は僕の仕事をもつと尊敬して呉れなければ、第一お前が僕達の運命が何によつて開拓されるかそれを少しでも考へたら――。」と彼は言つた。

「だけど、あなたのやうな方は結婚なさるのは間違つてゐますわ、一人でゐらつしやれば！。」

「又か。」と彼は言つた。そして此問題は彼がいつも打ちつかる牆壁だつた。が彼は藝術家が家庭を持つことが間違つてゐると思ひ切ることは出來なかつた、然し、事實は家庭が彼の藝術家であることを肯んじなかつた。彼は新しく突きあげて來る悲みをじつと堪らへた。彼は三四ヶ月前から一つの創作に取りかゝつてゐた。筆が少しも進まなかつた。彼は苛立つた。

絶望が彼を厭世的にさへした。彼は家庭を呪つた。妻と衝突した。妻と、そして淳一との生命を斷つて、自分も死んで行く場面を幾度か彼は心に描いた。そしていつも最後に力が足りないのだと思つた。自分はどんな理由の下に妻と爭はなくてはならなかつたとしても、貧しさの爲にだけは爭ひたくないと思つた。それは餘りに傷しい場面だから、たとへどれほど唾み合ふやうなことがあつても、それが、さぐり合ひや、嫉妬に原因してゐるものであつたらまだ可い、さうした場合の夫婦喧嘩はお愛嬌とも言ひうるから。がそれが若し貧しさの爲めであつたら、より固く結び合はされなくてはならない貧しさの爲であつたら、貧しさから起るいさかひは自信をぐらつかせ、希望を失はせる。厭世的になる、爭ふことを止めよう——彼は其度心に誓つた。

「私神田へ行つてゐようかしら、體がだるくてしようがないんですもの。さうしたらあなたも思ふように仕事が出來るし。」暫らくして妻が言つた。

健作は顏を顰めた。が打算が彼にそれを肯定させた。彼は此機會に二三日打通して仕事をして見ようと思つた。

「あゝ、さうして呉れ、長い間ではなくとも好いから。」彼はかう言つて妻を促した。

正午頃妻は大きなおむつの包みを抱いて、赤ん坊を背負つて神田の家へ移つて行つた。健作も丁度出勤時間だつたので、一緒に電車に乘つた。

「あなた、社の歸りに一日に一度は屹度寄つて下さいね。」九段下で電車を捨てる時、妻は先刻の喧嘩のことなどまるで忘れたやうに、こんなことを言つて、電車の中を見い見い俎橋の方へ歩いて行つた。

それから三日目の正午頃であつた。××書店の二階で、健作は洋服の上着を脱いで、額にじみ出る汗の滴を拭き〳〵、各地から集つて來る投書の整理をしてゐた。階下の帳場の傍に在る籠の中に、毎日溢れるほど詰め込まれてゐる、封書や、私製はがきや、官製のや、いろんな投書を二階に持ち上げて、其處の砂のほこりでざら〳〵してゐる疊の上に、一杯に押しひろげて、和歌、俳句、散文、コマ繪、といふやうに、一種類づゝそれを區別するのである。是は健作の不快な一日の中で最も興味ある數十分であつた。そして全く空頼みに終つたとしても未だ現れずにゐるものゝ芽を見出すと云ふことの興味もあつた。又其處には多くは

獨斷であり、無制節な感激であつたとしても、生きた人間の心が動いてゐた。

其時、階下から店員のKの聲で、

「××さん電話ですよ――」と呼ぶのが聞えた。彼は周章てゝ上着を引かけたなり、階下へ下りて卓上電話の受話器を耳に當てた。ヂヂヂ……と何時迄經つても相手が出なかつた。

「どなた――エ、私、健作です――エ、エ、エ。」そして漸う其聲が神田の母親だと知つた時、健作はドキンと一つこづかれたやうに感じた。

「あゝ千鶴子が――さう――では直ぐ、エ、ようございます。」電話を切つて二階に上つて來た健作は、昨日一日彼女の許を見舞はずに過ごしたことを、ひどく責められた。是非一度醫者に診て貰ひたいから來て欲しいといふ母親の言葉の裏に、何んとなく自分の無責任を責めつけてゐるものがあるやうに思つた。それで彼は俎橋近くの妻の家に駈けつけた。茶の間にゐた母親に、

「昨日は忙しかつたものですからつい！。」かうぬらつく體の汗を拭き拭き、言譯らしく言つて、緣側の處に赤ん坊を抱いてゐた妻に、

「どう、體の具合は。」と、勢はるやうに視線を放けて近寄つて行つた。

「ご飯が不味くつて、それに水ばかり呑みたくつてしようがないのよ。」妻は元氣のない聲で言つて、目尻の邊りに泪をにじませた。

「熱のせいだよ。」と、何氣なく言つて、妻の顏を覗くやうにした健作は、僅か一日見ない裡に、頰の肉のげつそりと落ちて、氣の故か眼球迄がひどく落窪んで了つたやうに思つた。彼は心の裡に、ぎよつとしたが、强いて顏色を動かさないやうに力めた。まだ二ヶ月と僅かより經たない赤ん坊は、妻の懷に安らかな眠りに陷ちてゐた。

「此處へ來てから、夜と晝とを取つ違ひて皆を困らせてゐますわ。」妻はかう目くばせしながら言つて、それとなく母親の五月蠅がつてゐることを示した。××診療所に出かけたのは其日の午後であつた。

「あの頃。」と健作は再び心に繰返した。二階の階段の昇り下りが彼女の病氣の原因をなしたといふ母親の說を、無條件で肯定しなければならないと彼は心に思つた。若しあのまゝ丘の上の家で、彼女が出產を濟まし得たとしたら、そして又產後、せめて二週間の間でも、看護

婦か、女中を雇ふ資力が自分にあつたとしたら、かう思ふことによつて、彼の心は再び暗く沈んだ。それは現在の彼が思ひ惱んでゐるそれと一致してゐたからである。金――それは此場合の妻に對する愛や、誠意やの一切を表示する原動力だつた。彼は次の日の午前、彼に取つて初めての經驗である金策の爲めに市内の古い知己や、親戚を二三個所歩いたのだつた。が、夕方彼は無一物で歸つて來た。電氣の點く頃であつた。母親は勝手で夕餉の仕度をしてゐた。病室へ入つて行つた時、赤ん坊は空の哺乳器を吸はされて睡つてゐた。妻は待ち兼ねたやうに彼を見て、につこりと微笑んだ。痩せた彼女の顔は微かな安心と喜びとに輝いた。

「暑かつたでせう。」

「ああ、今日は熱は何う、醫者が來たかね。」彼は帽子を脱いで彼女の枕許に坐つて額に手をやつた。氷嚢は生温かくなつてゐた。

「血は採らなくとも可いんですつて、もう此んなに病氣が良いんですもの。」彼女はつけ元氣らしく笑つた。

「さう良かつたね、痛い思ひをしなくつて濟んだ譯だね。」健作は冗談らしく言つた。が内心

助かつたと思つた。自家血清注射と云ふものを非常な高價に見積つてゐたから。二人は默つた。そしてお互に言うべきことを言はずにゐることを意識してゐた。

「僕がねお前、面白いものを買つて來たよ。」

彼は立ち上つて、入口に在つた新聞紙の包みを提げて來た。

「何に？　的てごらん。」彼は包みを妻の位置から少し離して置いて、

「バナ、！　貴方の買つて來るものはバナ、位だわ。」

「違ふよ、ハンモックさ、淳ちやんをのつけるんだよ。」

「まあ。」彼女は驚いたやうに健作の顔を見た。

健作は包みを解いた。其處へ小供用のハンモックが取り出された。健作はそれを飯田町邊を歩いてゐる時、ジト餘り流行さうもない洋服店の店先きで見付けたのだつた。店晒らしだと言つて、正札より三十錢値切つて買つて來たのだつた。

其處へ妻の弟の米吉が外から歸つて來た。そして傍から口を挾んだ。

「ハンモック、何處から買つて來たの、白木？　三越？　あゝ何んだいこりやあお古だ、お

古だ。」少年はかう言つて一度取り上げたのを其處へ輕侮するやうに放げ出した。

健作は默つて顏を顰めた。妻が目を怒らした。

「お古じやないわね、これごらんなさい、ちやんと正札が付いてゐるぢやありませんか。」蹈氣となつて、妻は手垢のついた正札を弟の前につきつけた。

「へん、こんな新があるかい、第一汚れてゐるじやないか——。」米吉も負けてはゐなかつた。

勝手から母親が顏を出した。

「何んです米ちやんは。」母親は目に角を立てた。そしてそれを手に取つた。

「まあ、ほんとに汚れてゐること、でも肺病の使つたものでさへなければね。」母親が皮肉らしく言つた。健作は唇を嚙んだ。

「お母さん迄お古だつて仰言るの、買つて來た本人に訊いたら一ばんよく解るでせう。」妻は憤然として、褥の中から體を乘り出すやうにして言つた。

「お止し馬鹿つ。」健作が怒鳴つた。

「お前達のために買つて來たんじやない、淳一のためにだよ、淳一はちよつとも不平なんか

言つてやしないじやないか。」

母親と、米吉とは立つて勝手の方へ行つた。健作は妻と顏を見合せた。

室の裡は暫らく沈默が領した。

「今日は何うだつたの、お友達の方にお逢ひ出來て?。」妻が氣遣はしさうに良人の顏を覗き込んだ。彼は默つて首を振つた。そして又暫らく默り合つてゐた。

「お藥りを戴いて來て下さいね。」妻が思ひ出したやうに言つた。

「あゝ。」それで彼は立ち上つた。其時赤ん坊が泣き出した。

「米ちやん。」と妻が弟を呼んだ。子供を見て貰ふためである。米吉は答へなかつた。

「米ちやんてば、嫌やな兒ね。」彼女は泣き聲を立てた。

「よし、僕が抱いて行かう。」健作は戻つて來て言つた。彼は赤ん坊を抱いて外へ出た。外は暗くなつてゐた、赤ん坊は泣き止まなかつた。

彼は電車通りへ出た。明るい飾窓の前に出る度に、立ち止つては電燈の光りで赤ん坊を泣き止まさうとした。赤ん坊はゲラゲラと泣いた。彼はかうして赤ん坊と二人取り殘さ

れた時のことを想像した。彼は恐ろしく絶望的になつた。ある書店の前に來た、新刊の雜誌や、書籍が棚の上に一杯に竝んでゐた。此恐ろしい試練がもう一二年後に來たらと思つた。彼は强い仕事に對する焦燥を感じた。力が欲しいと思つた。この屈辱も、貧窮も、下らない周圍とのいきさつも、凡てを解決するものは仕事だと思つた。彼は强い創作慾を感じた。力がつき上げて來た。がその力を、彼はどうすることも出來ない自分であることに想到した時、彼の心はひつぱたかれたやうに痛んだ。

三

翌日彼はもう一日勤めを休んだ。妻の經過は非常に良好だつた。朝、彼は座敷の柱から柱へハンモックを吊つた。そして赤ん坊をそれに載せて泣く度に搖つた。赤ん坊は動搖につれて泣き止んだ。米吉は面白がつて亂暴に搖つた、褥の上で妻がそれを止めた。米吉は肯んじなかつた。それで姉弟はよく喧嘩した。

正午頃、健作は麻布のS氏から速達便を受け取つた。S氏——彼はその人の名を心に呼ぶ時、强い愧と、責めとを覺えずにはゐられなかつた。S氏と彼との交渉はもう五六年越續いて來たのだつた。其頃彼は北國の火山の麓街に住んでゐた。其處で初めて彼はS氏を知つたのだつた。S氏は小說家であつた。そしてS氏も若い頃、その火山の麓町に住んだ記憶を持つてゐた。彼はその麓町でS氏の著作を熱讀した、當時健作は廿歲前後の靑年であつた。彼自身まだ文學で起たうとも別な方面に走らうとも心の定らない時代であつた。彼が文學で起たうといふ考へを持つて上京したのはそれから一二年の後であつた。其頃から彼はS氏の家庭に出入するようになつた。有形無形に彼はS氏から並外れた厚意を受けた。最近二三年間彼はS氏の著作からも、S氏其人からも遠ざかつた。彼は過激な思想を盛つた多くの著作を貪り讀んだ。自ら日向の山深く迄走つて、ある新會社の建設にも携つた。が、かうした彼が、時として全く衝動的にS氏の著作を展げるやうなことがあつた。彼が獨り靜かに自分の心の內部の聲に耳を傾ける時であつた。それは異邦人が遠い鄕國を慕ふ心情にも似てゐた。其處には夕暮の如き靜けさがあつた。たとへばシャバンヌの繪畫に見る如き高い氣品と、平明と、靜謐と

があつた。だが――彼はそれだけの思慕と愛着とをS氏の藝術に對して把持してゐるといふことが、既に二年近く接近しないS氏の愛情に甘へて好いといふ理由にはならなかつた。此場合甘へるといふことは、魂を――媚を――賣ることと、同意味に取れるやうに思はれた。それよりも彼はS氏に自分が狡猾い奴と評價されることは堪らないと思つた。それほど彼は自分を下劣な人間として考へたくなかつた。が事實は、彼はS氏に宛てゝ合力を得たいといふ手紙を書いてゐた。それはあの場合の彼に取つて唯一の取る可き道ではあつたが――そして今それに對しS氏から、「一寸立ち寄つて欲しい。」といふ手紙を受け取つたのだつた。彼は聰明なS氏のあの底光りのする眼が、自分の心の内部を見拔いてゐない理由はないと思つた。

夕方彼は九段下で青山行の電車に乘つた。指定された時間にS氏を訪ねる爲であつた。六本木で下車すると、彼は見覺えのある坂道を下つて行つた。折惡くS氏は留守であつた。取次ぎに出た女中が、「お見えになりましたら是を差し上げるやうにお申しつけでございました。」かう言つてS氏の著作の一部を健作の前に差し出した。彼はそれを受け取るとひどくちぐはぐな思ひをして其處を辭した。彼は解き難い謎をかけられた時のやうに感じた。彼は夕

暮近い電車道を六本木の停留所の方へ歩きながら、其時、S氏が自分のために選んで呉れた著者自身に取つて、恐ろしい危機であつた最初の家庭生活の記錄とも云ふべきその著作の頁を繰つた。其時彼は、頁と、頁との間に白い紙片の折り疊まれて挾んであるのを見た。そしてその中から、十圓紙幣が四五枚頁の上に亂れた。彼はひどく昂奮した。それから紙幣の挾んであつた紙片に瞳を凝らした。鉛筆の走り書きで、

「艱難の多い日が早くも君達の新しい家庭にやつて來たことを知りました。こゝに僅かばかり有りますから使つて下さい。」と簡明に書きつけてあつた。彼は二三度それを默讀してゐるうちにじつと瞼の中が熱して來るのを感じた。態と逢はずに誠意だけ相手に徹底させようとするS氏の心遣ひが、彼に感謝の念を一層強めさせた。彼は助かつたと思つた。妙に氣が彈んで駈け出したい氣さへした。彼はそのまゝ銀座を廻つて、藥用葡萄酒と、肉エキスを病人の爲に買つた。

其晩家に歸つた時健作は、

「お前安心おし、もう大丈夫だから。」と妻に言つた。

「ほんとうに良かつたわね、私癒つたらきつとお禮に行きますわ。」妻は一晩中言ひ言ひした。

四

二三日經つた、妻は危險狀態を通り越した。醫者は小量の粥を攝ることを宥した。赤ん坊はハンモックの上で終日過さなければならなかつた。健作は正午頃勤めを早退きにして歸つて來た。珍らしく妻は褥の上に起きてゐた。褥の位置もいつもとは反對に、頭の方を明るい庭の方へ向け敷いてあつた。

暑い陽は重り合つた隣家のトタン板の屋根庇に碎けて、その照り反しで家の中は一層蒸し暑かつた。

「顏色が大へん良いようだ——。」妻の枕許に坐つた時、健作が言つた。

「今日はもう熱がすつかりありませんの。」妻は、急に出の細くなつた乳房を詰らなさうに弄びながら言つた。薄白い汁は、乳首の頭から二三滴にじむやうに垂れた。

「晝飯は？。」健作が訊ねた。病氣になつてから、彼女は食事を凡て健作の命令のまゝに攝つてゐた。

「鯛の煮たのを是れつぽつち。」と彼女は量を示すために指で輪を作つて見せた。

その時健作は彼女の枕許に濡れた二寸程のみご束のやうなものの轉がされてあるのを發見した。

「是は？。」と彼が訊いた

「今日お隣りの叔母さんが、榎町のお釋迦さまから態々戴いて來て下すつたの、是でお念佛を唱へながらお腹の上を何んべんもこすれですつて、隨分可笑しいわね。」妻が笑ひながら說明した。

「それでお前はこすつたのかね。」彼も苦笑しながら妻の顏を覗くやうにした。

「えゝ、でも折角遠くまでお參りに行つて來て下すつたのですもの。」彼女は顏を赧くして言譯らしく答へた。

「褥もあの叔母さんが敷き換へて呉れたのよ。北枕は縁起が惡いんですつて。」

「さう。」彼は言つた。

「お隣りの叔母さんがあなたを褒めてゐたわ、お宅ではよくお仕になるつて。」彼は、妻の媚びるやうな瞳を避けるやうにして、

「それから。」と追求するやうに言つた。

「あなたは奥さん孝行ですつて、それで私は幸福者だつて皆の前で言ふのよ。」彼女は滿足さうに笑つた。そして其笑ひには愛情と、感謝とが含まれてゐた。

此場合のお隣りの叔母さんの言葉は、單なる噂さ話ではなかつた。彼女自身の心を健作の前に表示するために引用されたものだつた。彼はそれを感じた。そして心から滿足した。

ハンモックの上で赤ん坊が泣いたので彼は立つて行つた。哺乳器は空だつた。彼は新しく乳を作る爲に勝手許に行つた。其處で米吉の周章てゝ出て來るのに出會した。米吉は逃げるやうに病室へ入つて行つた。ミルクの垂れた痕で、板の間はベト〳〵してゐた。彼はミルクを瓶に移さうとした。昨日蓋を開けた罐が半分ほどに減つてゐるのを發見した。彼は顔を曇らせた、彼は乳を薄めてそれを赤ん坊に哺ませた。そして輕く搖つてやつた。

彼はチラと次の室を見た。妻の褥の後に置いて在る火鉢の傍に米吉が檢温器を弄んでゐた。少年は健作の見てゐることを氣附かなかつた。それでそれを火の上に翳した。初めは遠火にしてだんだん火に近く翳した。水銀はぐん〳〵と昇騰した、健作は驚いた。

「米ちやん！。」と彼が叫んだ、其時ガラスはピンと輕い音をたてゝ碎けた。

「おや。」と妻が眼を瞠つた。少年は緣側の方へ逃げ出した。が、それを隱し蔽へないと思つた時、單衣の襟に敏速に押し込んだ。妻がそれを見てゐた。そして

「米ちやん、駄目ですよ、そんな狡猾いこと。」と褥の上から咎めた。

二階にゐた母親が降りて來た。健作は口を噤んだ。

「お母さん。米ちやんが檢温器を碎いたんですよ。」妻が挑戰的に言つた。

「嘘だい！。」少年は捨鉢らしく否定して、言ひ付けるときかないぞと言うやうに剝いた白い眼を姉に向けた。

「何んです他人樣の大切なものを。」母親が皮肉つた。そして米吉を睨んだ。

「嘘だい、以前から碎けてゐたんだい。」少年は强情に言ひ張つた。そして一度襟の間へ押し

込んだ檢温器を漸う拔き取つて妻の褥の上に投げた。

「要らないわね、ちやんと以前の通りに直して頂戴！。」妻の手によつて、尖端の碎けた細身の三分計が、一片のガラスの破片として緣側に放り出された。陽光がキラ〳〵と碎けた。

「さあ、母さんにお言ひなさい、お前が碎いたのか何うか。」

「母さんは私達が嘘を言つてゐると思つてゐらつしやるの。」妻は憤然とした。

「お止しお前は病人じやないか。」健作が堪り兼ねて怒鳴つた。

「私が新しく買つて來ますから。」母親は立ち上つた。

「直ぐあゝだ、嫌やな母さんね。」妻は泣き出しさうな顏を健作に向けた。

健作は押默つた。そして不幸な母親の背後姿を見送つた。彼は矢張り不可なかつたと思つた。彼はあの朝、妻を此處へ移らせる時、感じた豫感が適中したことを思つた。二度と彼は此愚かしい場面を繰り返すまいと心に誓つた。

「仕事をしよう、總てを解決して呉れるものはそれ以外に何物もない。」と思つた。彼は妻を見た。妻も彼を見た。其眼は許しを乞ふてゐるやうに見えた。

「僕は。」と彼は言つた。

「急に仕事をしたくなつたから、音羽へ歸るよ。淋しくつても明日の朝迄我慢しておいで、今度こそあれを書き上げるからね。」

「あなた母さんを宥して上げてね。」妻は泪ぐんだ。

「お前のお母さんは、お前を生んだ人だ、僕はその人を憎む氣にはなれない。然し今は、ひどく僕達も、お母さんも皆の境遇が惡いんだ。僕は何んとも思つてやしない。たゞ仕事がしたいんだ。力ではり切れるやうな仕事をね。」

彼は立つて行つて、赤ん坊を見た。赤ん坊は眠りかかつてゐた。汗が顏一面ににじんでゐた。彼はそつとそれを拭いてやつた。

五

夕方、健作は久振りで音羽の家の二階に上つて行つた。彼は戸障子を全部開け放つた。む

せ返るやうな青葉の丘が窓近く迫つてゐた。家の中は砂ほこりが厚く溜てゐた。書棚や机の上も白くなつてゐた。床の花瓶の花がガサ〳〵に枯れ朽ちてゐた。一通りはたきを當てた後で彼は机の位置を目白臺に面した小窓近く移した。其處で彼は書きかけの草稿を展げた。それは妻を知つた前後を取り扱つた彼の自傳的のものだつた。彼は紙を繰つて書き溜めて置いた分を二三枚讀み返して見た。そして彼はこれから書き進んで行くべき事象を心に描いた。彼は急に嚴肅な感激に撲たれた。彼は泣き出しさうになつた。妻と、そして淳一とのことを思つたからである。彼は其小説に書きつけようとする時代から、今日迄に妻と共に歩んで來た道を思ひ返した。寂しい、然し泪含まれるような力強い道だつた。全く愛されてゐると彼は思つた。そして同時に二人の運命は全部的に自分に負されてゐるのだ。自分はそれを狂はしてはならないと思つた。さう思ふことによつて、彼は力と滿足とを感じた。彼はペンを執つた。

其年の春、妻に會見するために信濃から上京した時のことを書いた。其頃彼女の周圍には彼に取つての幾人もの競爭者を見出さない譯には行かなかつた。そして又其競爭者は彼より

は數倍優秀な社會的位置を具備してゐた。彼の持つてゐるものは白熱的な愛情以外には何物もなかつた。彼女も又、習慣と、周圍の輿論とを踏みにじるにしては餘りに弱い女性であつた。彼は數日間逢ひ續けたにも關らず、遂に彼女の心臓を掴むことが出來なかつた。彼は失戀者の悲痛な心情を抱いて信濃へ還つた。彼は當時經驗した慘ましい心の狀態を如實に書きつけようとした。彼は電燈の點いたのを知らなかつた、夕飯には彼はパンを喰つた。九時頃彼は疲れたので着物のまゝ横になつた。彼は眠つた。眠りから覺めたのは二時であつた。四邊は森としてゐた。時折、階下の人の寢返りを打つのが聞えた。彼は肌寒を覺えたので着物の上に洋服の上着を引つかけた。頭が冴へて總ての物の象が明瞭と映つて來るのを感じた。彼は再びペンを執つた。彼は最後の一節にペンを落す時、一度書き上げられた紙數を算へて見た。それがまるで愛撫するかのやうに見えた。六十五枚——それがその紙數であつた。彼は全部で七十二三枚に書き上げようと思つた。

愛するものに呪ひを送つては不可ない——と彼はその一節の冒頭に書きつけた。實際その時迄、此簡明な一章ほど彼は權威ある文字に出會さなかつた。彼は彼女の態度の不徹底さを

限りなく呪つた。衝き上げて來る劇しい怒りと、呪詛とを盛つた手紙を間斷なく書いた。が怯懦がそれを投函させなかつた。愛する者に呪ひを送つては不可ないといふのが彼の信條であつたからである。彼は自分の信條の破綻に苦しまずにはゐられなかつた。もう一歩で彼が彼の標榜する愛と、信條とが概念の幽靈に外ならないといふ皮肉な現實曝露の前に面接しようとした時、彼は、彼女の姉から、彼女の高い發熱を知らせる手紙を受け取つた。彼の腹立は此事實の前に消散した。彼は初めて嚴肅なものゝ前に立つたことを感じた。彼は自分の愛情を徹底させる爲に周圍と習慣とを無視した。彼は、彼女を自分の愛する者として、積極的に打ち突かつて行つた。彼は何物をも恐れなかつた。自分が彼女の肉親の何人よりも彼女に近いものだといふことをも露骨に宣言した。此處迄來て初めて、彼の信條は概念の衣を脱いだ權威を生じた。愛する者に呪ひを送つては不可ないといふ言葉は、彼の血稅によつて贖はれた權威ある信條となつた。そして彼のこの眞摯な態度は偉大な効果を齎した。何故なら彼がその四月の中旬に、彼の同志が西の國に起さうとしてゐる理想鄕へ旅立たうとする時迄には完全に彼女の心臟を摑んでゐたから——彼は此最後に贏ち得た愛の勝利を强く力說してペンを摑いた。

彼は最後のペンを摑くと、ぼかんとした。暫らくして昂奮が彼を去つた。彼は立ち上つた。窓の障子を開けた。靜かな黎明だつた。薄い乳色の靄が目白臺一帶の青葉の丘をやんはりと包んでゐた。ヒタヒタと肌に觸れて來る大氣は素絹のやうにひやつこく、且つ魅力的であつた。雲のない淺黃色の空に星屑は夢のやうに淡く溶けかゝつてゐた。昵つと耳を澄してゐると、何處からともなく呼ぶやうな、吼へるやうな、一種底力ある響音が傳つて來た。それは目覺めて行く大都會の聲であつた。健作はその時、神田の家の六疊で、窓の小障子から流れ込む薄明りの中に靜かに眠つてゐる、淋しい、それでゐて何處か幸福さうな微笑を浮べた妻と淳一との寢顏を想像した。彼は暫らく間、浴びるやうな彼等の愛情の裡に昵つと立ち盡してゐた。（完）

傷ましき場面

千九百二十一年四月

時、

現代、秋の日の午後四時より五時頃に至る。

場所、

東京の郊外

人物、

高村哲三	青年作家	廿六歳位
同　美津子	その妻	廿二歳位
同　和夫	長男	生後五ヶ月位
篠田速夫	友人 洋畫家	廿五歳位

哲三の書書齋、近くの落葉せる枯木立の間に二三棟の新立の長屋、寺院の屋根等見える。遠くS監獄の赤き練瓦塀が隱見する。正面の床の間に一面の油繪の額が懸けてある。所々破れたる障子、障子に寄つて極めて貧弱なる書棚。四五册の新刊書が無雜作に竝んでる。一閑張の机の上に書きかけの草稿及びエンク等が亂雜に載せてある。ガラスの一輪ざしに大輪のダリアが挿してある。机の傍に火鉢が置いてある。

入口の壁に畫嚢が立てかけになつてゐる。篠田、髪をオールバックにした快活なる青年。畫家らしき服裝、踏臺の上に乘つて下手の壁に高村の妻、美津子の半身像の油畫の額をかけようと苦心してゐる。少し離れた所に美津子立つて眺めてゐる。血色惡く一見腺病質らしく見える。質素なる作り髪は無雜作に束ねてゐる。

篠田。(兩手で額を捧げて、反身になつて見乍ら)曲つてゐますか、(心持額を下げる)ほら今度は、此位の傾斜が可いでせう。(臺を下りて美津子と竝んで眺める)

美津子。そうね、もう一寸反つた方がよくはなくつて。(笑ひ乍ら)

篠田。(美津子と額とを見較べて、微笑み乍ら)思つてゐる半分も描けてゐない、日向にゐた頃、漸う貴女を承諾させて一度デッサンを取つたことがありましたね、あれから僕は幾度び此畫を描き換へたらう。何にしろ高村君と一緒になる以前の貴女を知つてゐる僕には、處女時代の貴女の幻影が邪魔になつて、現實の貴女を描くことがどんなに苦しかつたか、まだ描き足りない處は幾何もあるのだが(寂しそうに)急に此處を引き上げなければならないのだから……。

美津子。ほんとうにあの頃、(感慨深さうに)あゝいろ〳〵な事が思ひ出されるわ、峠の茶屋や、渡し場や、私が初めて高村と住んだあの丘の上の小屋や、皆散りぢりになつて了つたわ、多津さんも、時子さんも、支那へ行つた美智さんはどうしたでせうね。

篠田。とう〳〵僕が最後迄殘りましたね。一緒に日向を出た故でもあるが、まるで高村君と反對の性質の僕が最後まで殘つたといふことは、寧ろ不思議な氣がします。

篠田、(篠田額に近寄り位置を直す、)此位ですか、今度は可いでせう(直す圖端に壁の釘取れて額外れる)美津さん一寸下を持つて下さい、(背後を向く)

美津子。(近よつて額を支へる)えゝ其位が宜ろしいわ。

篠田。(ポケットより釘と、金槌とを取り出して、)目をつむつて下さい、ゴミが入りますよ、(トン〳〵と打つ、高村登場、小作り痩せて蒼白き青年、此光景をチラと横目にて見て其儘机の上に包を置き、坐つて書きかけの原稿紙を展げて何か書き續ける。額をかけ終つた篠田踏臺を片付けて、高村に)

篠田。お歸り。(輕く挨拶をして少し離れた處にて額を眺める)

美津子。どうして、岡本さんにお逢ひ能きて……。(氣遣はしげに高村の顔を覗く)

高村。あゝ。(卒氣なく)

美津子。見て下すつて、どう?。

高村。(五月蠅さうに)仕事をしてゐる時は默つてゐて下さい。(嶮しく妻を睨む)

(其間、篠田懷し氣に室の裡を歩き廻る、)

篠田。(獨白)いよ〳〵別れるとなると何もかもが懷しく思はれる、一方へんに寂しい氣が爲ないでもない(今度は高村に)今日荷物は大方運んだ、後少し細かい物だけ殘つてゐる切り

だ、三脚や、畫板だから序の時寄つて行くことにしよう、それから此美津さんの油繪はまだ少し描き足りないんだが……紀念といふのも變だが、何も君に殘すものがないから……此處にかけさせて呉れ給へ。(寂しく笑ふ)

高村。(ペンを置いて篠田を見る)。有りがたう、何か手傳はうと思つてゐたのだが、隨分早く濟んだね。

美津子。(高村に甘いるやうに)位置は此處が可いでしよ、私篠田さんに此處にして戴いたのよ。

篠田。(ポケットより時計を取り出して見る)もう四時だ、では僕失敬する。(立てかけてある畫囊を肩にかける)

高村。では僕も二三日の中に君の方を訪ねる。

篠田。(二人に)あゝぜひ、美津さんも一緒にね、さよなら。(篠田高村と握手して退場、美津子後より退場)

(高村机に向ふ、書きかけの草稿を二三枚繰つて所々拾ひ讀みする、苦し氣な表情浮ぶ)

高村。あゝ駄目だ、全るで出て居ない。(原稿を投げつける如く机の上に置きて、背後に倒れる)

高村。どうしてかう頭が惡くなつたのだらう。(急に苛々して伸びたる頭髪をかき搖る)

間

美津子登場

美津子。(高村の倒れてゐるのを見て)あなたどうかなすつて、お眠りになつたの(高村の傍に倚つて顔を覗く、)あらそうぢやないわ、まあ、あの恐い眼、いやよそんな恐い眼でお睨みになつちや。(强いて寂しく微笑む)

高村。(起き上つて)美津子……僕の眼がそんなに恐い、そうかしら。(深く考へ込む)

美津子。ほんとうにあなたのお眼の恐くなつたこと、あの日向にいらつしつた頃の、活々した青年らしいお眼はあなたの何處からも見出せなくなつてよ。(力なく)

高村。(神經質な目で妻を見る)人間は境遇によつて表情迄がいろ〳〵に變つて來るさうだ……僕の傷しい心の内部の光景は眼に迄現はれてゐるとお前は云ふのだね。

美津子。いゝえそんなことはないわ、直ぐあなたはそういふやうにお取りになるんですものそれに、(一寸口籠つて)あなたは惡い性質ね、他から歸つていらつしやる時、何時もどうしてあんな不機嫌な顔をなさるの、篠田さんが隨分氣を惡くしていらつしつてよ。

高村。(急しく)篠田がお前に何か言つたのかい。

美津子。(周章てゝ)いゝえ、たゞ私そんな風に思つただけよ、あなた。(寂しさうに)

高村。何あに、

美津子。(火鉢の灰をつゝつき乍ら)とう〳〵二人切りになつたのね、(高村を見る)

高村。寂しいかい、(皮肉らしく)篠田がゐなくなつて、

美津子。そりや寂しくないことないわ、篠田さんは一番古いお友達なんですもの、それにもう一年よ、あの人と一緒に日向から歸つて……。だけど私の云ふのはもつと別なことよ。今月からはあなたの月給だけでしよ。(泪ぐむ)

高村。さうだ、僕は芋を嚙つても他人の同情で生きるよりは幸福だ……お前にはそれが出來ないといふのか。(妻を睨む)

沈默――間

美津子。(思ひ出したやうに)小説の方どうなつて、岡本さんが見て下すつて、(高村の顔色を窺ふやうに)

高村。岡本氏は逢つて呉れた。だが僕はあの人の前に出ると、急にあんな作を持ち廻つてゐる自分がひどく恥しく、むしろ滑稽な氣さへして來た。それで、余り自信が持てない作で却つてお目にかけたことを恥かしく思ひますから、どうぞお返しなすつて下さい、といつたら岡本氏はまだ見てゐないが、是非あれは讀ませて慾しいと言はれた……。

美津子。岡本さんのお書齋はお立派でしよ、

高村。いや僕の通されたのは書齋ではなくて應接室だ、窓には樺色のカーテンが垂れてゐた素晴らしく大きな額や、澤山の彫像や、隅の方にピアノが置かれてあつた。

沈默

高村。(顔を上げて)美津子……たとへ岡本さんが推薦して下すつたとしても、僕はあれを出すのは止さうと思ふのだ。

美津子。何故ですの、そんな恐ろしいことをお聞かせなさらないで下さい。(不安さうに)

高村。(沈んだ調子で)でも餘り氣が退けるのでね、無論本氣さでは何人にも劣りはしないつもりだが、ドストウエスキーや、ユーゴーの偉さに較べると、力の足りないことを餘りにも露骨に感じさせられるからね。

美津子。(思ひ出したやうに)あゝそうそ、先刻篠田さんがお菓子を買つていらしつて、あなたに上げて呉れとおつしやてよ、私お茶を入れて參りますわ、

(美津子退場高村再び原稿をかく)

間 (美津子登場、茶道具、菓子鉢に盛りたる菓子を持つてゐる。)

高村。(顔を上げて妻の姿を見る)和夫はどうしてゐる。

美津子。今眠つてゐますわ、あれからお書けになつて、(茶をつぎ湯呑を高村の机の上に置く其手にて机の上の草稿に手を觸れんとする)

高村。(菓子を喰ひ乍ら周章てゝ)いや見なくとも可い、(少し荒々しく美津子の手首を握る)

美津子。まあどうして私が見て悪いの(憤然として高村の手を振切つて原稿を奪はうとする)解つてゐるわ、きつとあなたはあのことをお書きになつたのよ、私と篠田さんのことを・・・・嘘ばつかり。

高村。(急に哀願的になる)美津子見ないで呉れ・・・・頼む、たとへ此作の中にお前と篠田らしい人物が出て來たとしても、決して取扱つてある事件が事實だといふのでもなければ、又それをお前に知られて都合が悪いといふのではない、僕は自分の仕事に對して、そんな怯懦な人間ではないつもりだ・・・・もしお前が、藝術家が自信の持てない自分の作品をどんなに他人に見られるのを厭ふか、ほんとうに少しでも、僕の氣持を知つて呉れることが出來たら・・・・。(高村、妻の手より原稿を取つて机の端に置く、美津子俯向きて沈默)

高村。(突然)美津子(語調をかへる)

美津子。ハイ・・・・

高村。今日からは二人切りだ・・・・篠田もとうく行つて了つたね(苦しげに)あゝ僕は寂しい・・・・美津子・・・・(美津子の肩から乳の邊へに順に視線を落す、沈痛なる調子にて)お前は

痩せたね、(眼の光り次第に病的になる、視線を美津子の顔に移す、此時顔を上げたる美津子の視線と合ふ、高村、衝動的に美津子を抱く、)

高村。あゝ美津子・・・・許して呉れ・・・・ね、此んなにお前を・・・・痩せさせてね・・・・、(強く妻を抱きゞめて泣く)

美津子。(羽織の袖にて高村の泪を拭ひ乍ら)いやよ、そんなことおつしやつては、私寂しいのよ、あなたがお書けになれない時の、あーあといふあの歎息をお聽きしただけでも、私たちの前途の幸福も、希望も、みんな打壊されて、何もかもが駄目になつて行くやうに思はれますの。

高村。(机の前に復つて、)お前の繋いでゐる一切の希望が、此世の中の光りといふものゝ生れて來る社が、僕に在ると思つてゐるお前は何んといふいぢらしいことだ・・・・あゝ僕はどうすれば可い、

美津子。あなたの希望の社はお仕事でせう、さうよ、あなたは何時も誰のことよりもお仕事のことを考へていらつしやいますわ。

高村。お前にはそう見えるかい(力なく)さうだ男に取つて仕事は大切だ…だが美津子、其仕事に對する力は何處から生れて來る、もしお前が僕の勇氣や、希望の燃え上る心の宿を少しでも知ることが出來たら…そしてそれがどんなに限られた脆い生命の宿であるかを…(急に決然たる調子にて)美津子、お前は家へ歸つて呉れないか。

美津子。(驚きて)何んですつて…。

高村。かういふことが、どんなにお前に取つて耐へ難いことか、僕はそれを知らないではない…併し美津子、此儘で行くとお前は精神的にも、肉體的にも駄目になつて了ふ…今のうちなら…。(言ひかけて口を噤ぐむ)

美津子。(悲げに高村を見る)父の居ない、あの意地の悪い繼母と、妹のゐる家へ歸れつてお つしやるんですの、それがあなたの心の奥からのお言葉ですの…私と、そしてあの小さい和夫との運命に對して、賢こい父親の御命令ですの。(きつとなつて高村を睨む)

高村。命令! 美津子さういふやうに取らないで呉れ、賴むのだ…何もかも無條件で僕の言葉を享け入れてくれ…。

美津子。いえ、私歸りませんわ、家へ歸るよりは私死んだ方がよろしいわ…ね、あなたでしようですからそんなことお仰言らないで下さい(やさしく)あなた、昨日病院で院長さんが何か仰言つて…。(氣遣はしげに)

高村。いや(何氣なく)どうして?。

美津子。でも可笑しいわ、昨日お歸りになつてから急に悄氣ていらつしやるんですもの…私には肺尖だけだつて仰言つたけれども…正直に言つて頂戴、私もう驚かなくつてよ、…それに咳のことなんか詳しくお訊きになりましたわ…どうも變よ…、あゝもし病氣が進んでゐたら…。(悄然として)

高村。いや、あの院長は隱しだてのないので有名だ…お前のは併も肺尖が固りかけてゐるんださうだ…美津子、お前に家に歸つて欲しいと言ふのは、病氣が重つたからといふのではない、この事はづつと前から言はうと思つてゐたことだ…僕は正直に白狀する、實際僕はお前と結婚したことを取り返しのつかないことを爲たと思はない譯には行かないのだ…。

美津子。さうよ(皮肉らしく)きつとあなたはさう思つていらつしやるんだと思つてゐたわ。

高村。まあお聽き(なだめるやうに)それじやまるで話が出來ない・・・・では僕は、お前といふ言葉を取り消さう・・・・つまり僕は藝術家が家庭を造るといふことがどんなに不合理だかと云ふことを感じたと言ふのだ。最も此事は、結婚する前から知つてゐたのだ。・・・・少くとも理窟の上では、併し、知つてゐたと言ふ事と、感じたと言ふ事とは醫者と患者程異ふのだもしそれが眞劍に人生の野に戰はうとする戰士であればあるだけ、結婚と言ふことは多くの悲劇を作らない譯には行かない・・・・そういふやうに此世の中が出來てゐるのだ。別けても僕のやうな懷疑家が家庭を造ると言ふことは宥されることではないのだ。それでも僕は僕の根强い愛はきつとお前を幸福にすることが出來る。・・・・さう幾度自分の心に誓つたらう・・・・あゝそれだのに・・・・。(耐へられない如く机に顏を埋める)

美津子。ええ私よく判つてゐるわ・・・・それ以上おつしやらないで下さい。(泣く)

高村。(顏を上げて)いや、お前はさう言ふやうな言ひ方を止してくれ。僕の言はうとすることが僕以外の者に判つてゐると云ふ事は有り得ないことだ。それで僕は長い間幸福と言ふ

ことについて考へて見た。初めはお前の爲に僕の求むる幸福と同等な幸福を與へようとした、そしてその結果としてお前に苦しみを與へた。僕がお前を日向の山の中へ呼んだのはそれだ。甲に取つての幸福が乙に取つての幸福ではないことは判りきつたことだ。東京へ出てからの僕は、絶へず何がお前に取つて幸福かそれのみに心を碎いた。そして最後に美しい着物と、美味しい食物と、なだらかな道を、樂しさうに手を繋ぎ合つて行くことがお前の幸福の凡てなのだと言ふことに氣づいた。それからの僕は、古道具屋で卓上ピアノや、琴の値を訊いたりするやうになつた。時として、電車の中で竝んだ女の細い指に欽められた黃金色に光るリングを見たりすると、すぐに夜街の散歩の折など、よくリング屋の明るい、ショウウインドの前に立つお前の姿を思ひ出す。美しい着物を着た女を見てもさうだ、僅かの物質の力で幸福になれるお前に、僕は新しい下駄一足買つてやることさへ出來ない無能力者だ・・・・美津子僕は白狀する、それは勿論、瞬間的にではあつたが・・・・莫大な金を盜まうと思つた事も、人を殺さうと思つたこともある。皆お前と結婚してからの經驗だ。こんなやうな僕が長く お前を囚へてゐればゐるほど、お前の幸福の根を斷つて了ふ、

そればかりではない、お前の肉體をも殺し切つてアまはなければならない。(美津子袖に顔を當て聲を上げて泣く)

高村。あゝお前は泣いてゐるね、又こんなことを言つて了つた。僕は何うしてお前を苦しめるようなことばつかり言はなければならないのだらう。美津子、家へは歸らなくても可い。なるほど僕は時としてこんな事を考へる。この家庭生活が僕の創作力を亡ぼす唯一のものであるならば、速かに家庭やそれに伴ふ羈絆を遁れて、ひたすらに創作に沒頭しやうと、がこんなことを考へるのは馬鹿の骨頂だ。かうして生れた僕の藝術がたへと憶萬の人の惱める魂を慰めることが可能であつたとしても、一人の、併も自分を信頼しきつてゐる女性の魂の住家を奪つた罪は、永久に消し去ることは出來ないのだ。よし又僕が家庭を捨てゝ萬人の心の糧となる藝術を生むことを許されたとしても：僕が半生の戰の後に血を以つて購ひ得た愛する者を、心の住家を、生命の泉を捨てるなんて、あゝどうしてそんな恐しい事が：美津子僕はそんな強い人間ではない、愛する者なしに生きられるほど：：僕はそんなことを想像することさへ恐しい、此世の中が暗くなるようだ。歸すものかお前が歸ると言

つたつて、僕が歸しはしない。美津子、泣くことを止めてくれ、泣かないでくれ。

美津子。あなたは、何もかも判つたようなことをおつしやる癖に本當の女と言ふ者がこれぽつちも判つてはいらつしやらないのよ、女の幸福がどんなものかなんていふことが、寶石も、リングも皆慾しいのよ、だけど、だけど、女に取つてもつと必要なのは力强い男性の愛なんだわ、どんなに外から美しい造花を結びつけたつて根を斷れたローズがなんになつて。(間)今日のあなたは本當にどうかしてゐらつしやるのよ。あなたの弱蟲——あなたはお忘れになつて、あの日向にゐた頃、山深く離れた一ツ家の寂しいランプの下で、よく項羽の最後の場面を讀んでお聞かせなすつたことを：：そして震ひ上るように立ち上つて私の體を抱いて、燒きつくような接吻をお放げになりましたわね！あゝあの頃私、清い愛情の頂點で、あのまゝ死んでも可いと思つたことが一度や二度では有りませんでしたわ、東京へお出になつてから、別けても此頃のあなたは、本當にお變りになつてよ、氣持が荒んで一寸したことにもすぐいら〳〵してお叱りになるんですもの、あなたは御病氣なのよ、何より先きお體をお癒しにならなくつては、あゝこんな時、お父さんがいらしつたら、きつ

と何もかもがうまく行くんですわ……。

高村。僕は病氣ぢやあ無いんだ。安心してくれ、たゞどうも頭がはつきりしないだけだ、それに此頃は時々絶望的になつたり、無精に寂しくなつたりしてね、夜街の雜閙の中をお前と歩いてゐる時なんかでも、實にどうすることも出來ない寂しさに囚はれる事がある、いらく〳〵して急に一人になりたくなる、然し之れは皆仕事に對するいらだちなのだ。そしてそんな時定まつてお前を苦しめる、お前がどんなに僕に取つて必要だかと言ふことを忘れたかのように、戰ひ、敗れ、周圍のすべてのものから離れた最後の項羽にも、尙傷つき疲れた彼の爲に優しい胸に溢れるような愛の泉を湛へて彼を待ち迎へた眞美人のあつたことは、どんなに力づけ、慰めたらう、人生は寂しい旅路だ、愛は限りなく續く、灰白色の道に咲くせめてもの慰さめの花だ美津子、僕は寂しいのだ、どうか僕を捨てないでくれ、僕の爲めに、僕の仕事の爲めにお前の一切を捧げつくしてくれ。

（高村昂奮して美津子を抱く、美津子夫の胸に顏を埋めて泣く、次の室にて小兒の泣く聲聞ゆ。美津子現實に復りたる如く、周章て立ち上り行かんとして急に）

美津子。あなた（困つたと言ふ表情）大變よお乳がないわ、

高村。どうして、昨日買はなかつたのかい。

美津子。ええ。

高村。どうして。

美津子。だつて。（口籠つて）

（再び小兒の泣く聲聞ゆ前より一層激げしく。美津子退場。間　美津子丸く太りて愛らしき男の子を抱き空の哺乳器を吸はせながら登場）

美津子。おゝ好い兒、好い兒、お乳がなくていけませんね、今すぐこさへて上げますよ、

高村。昨日、篠田君から借りた金がまだあるだらう。

美津子、（子供を搖り乍ら）昨日お米屋さんに上げてよ、先月の殘りだけ入れて頂かないとお米を持ち歸るつて言ふんですもの、

高村。（少し急き込んで）それであの五圓を渡してしまつたのか。

美津子。ええ。

高村。・・・・(絶望的に妻を見る)

美津子。それから先刻電燈さんが來てよ、

高村。それでどうした。

美津子。小さいのがないといつたら、五十錢位ないことはないでしよ、どうしてもないなら仕方がないから今日中に持つて來て下さい。でないと、明日、消しに來るんですつて、

高村。(憤然と)なに、消すつて、生意氣な・・・・。

美津子。それも近所に聞へるやうな大きな聲をして出て行きましたわ、

(小兒劇けしく泣く。高村書棚より二冊ほど本を拔き取る)

高村。(本を美津子の前に置いて、)これをいつもの本屋に持つてゐつてくれ、そして歸りにお乳を買つておいで。早く。

(美津子從順に手早く風呂敷に本を包んで、小兒をすかしながら退場)

間　(室の內暮色蒼然と迫る)

(高村再び原稿を書き、やがて讀み返す、表情次第に嶮惡になる、原稿を引攫んで立ち上る)

高村。あゝ駄目だ・・・・(絶望的に呻いて苛立しげに原稿を無茶苦茶に捻つて投げつく、突然何事をか思ひつきたるものゝ如く、美津子の半身像の前に行つて暫らく眺める、眼の光病的になる全身痙攣する。)さうだ・・・・・・・矢張りそれに違いない、まるで描いたものと、描かれたものゝ心とが渾然と溶け合つて、永遠の美が・・・愛の頂點の心臟の鼓動が畫面に波打つてゐるやうだ、第一美津子の處女時代に見たやうな輝かしい眼の光りは・・・・。(腹立しげに額を荒々しく取り外す)畜生・・・・

(美津子以前の如く小兒を抱きて登場。額の外してあるのを見て驚く、

美津子。あなたどうなすつて。(高村の傍に寄りて額を取らうとする)

高村。(美津子を睨む)外して惡いといふのか、(皮肉らしく)篠田は僕の爲に是を殘したのではなく、お前の爲に殘したといふ氣がはつきり感じられて來た・・・・美津子お前はそんなに是が大切だといふのか、姦婦・・・・それほど大切なら呉れてやらあ・・・・。(額を美津子の足許に投げつける。)

美津子。痛い。(額緣に足を痛めたる如く蹲りて足の指を押へる。小兒泣く)

高村。(嫉妬に驅られて) 僕が歸つた時、是をかけてゐたあの場面は何んだ……だが美津子……お前は餘り無神經に他人の傍に寄らない方が可い……少しは自分の病氣の事も考へて見ろ……。

美津子。あゝ私、人に近寄つて惡いほど……そんなに惡いんですの……正直に仰言つて下さい……あなた昨日院長さんが何んと仰言つて……あゝきつともう……。(恐ろしき事を豫覺したる如く……泣く)

高村。(言はんとして躊躇ふ。一方極度の嫉妬と憎惡とに驅られて、遂に思ひ切つたるもの、如く) 美津子……お前の病氣ばもう二期に進んでゐるのだ……食器のことまで醫者は注意した……。(自分の言葉に怯える如く、顏を背ける)

美津子。(絶望的に) 矢張私の思つてゐた通りだ……二期……二期あゝもう私駄目だわ……(體を震はせて小供に顏を當てゝ泣く、狂へる如く)あゝ和ちやんが氣の毒だわ……生きてゐたいけれど、こんなじやもう駄目だ……(高村に) あなた和ちやんを見て頂戴……私行きますわ、誰もゐない處へ……お父さんの處へ……(小供に)ね、和ちやん……お父さん

を困らせないやうにおとなになるのですよ……。

高村。(妻の肩を兩手にて押へて哀みを乞ふ如く) 美津子許して呉れ……嘘だ……其證據には僕はお前の接吻でも何んでも拒みはしない (美津子の唇に接吻しよとする、美津子それをつきのける……)

美津子。えいえ、嘘ではありません……あなたはとう〳〵ほんとうのことを仰言つたのだわ……私の思つてゐた通りのことを……(決心せるもの、如く、子供を下に置く)和ちやんに感染ると大變だわ。(子供劇しく泣く、美津子もう一度抱き上げて頰に接吻する。思ひ切つて子供を置きて行かんとする……)

高村。(狼狽へて後を追ひ乍ら、)美津子お待ち、馬鹿……子供を置いて何處へ行かうとするのだ。(美津子を引き止めようとする、子供泣く、子供に氣を取られる。其間に美津子退場)

高村。あゝ (絶望的に。小供を抱き上げる。)傍の額に眼を落す、狂へる如く、火鉢の傍のナイフを取つて、畫布を引き裂く、美津子の顏暮色の中に僅かに殘る。次に棒の如く室の中央に突立ち、眤つと裂き殘したる妻の顏を凝視する。呼吸次第に迫る。悲み極度に達つせる

もの丶如く、全身を震はしながら、ナイフを投げつけて、ガバと疊の上に小供を抱き〆め
たるま丶體を投げ出す。聲を上げて唸るやうに泣く。小供劇しく泣く）

（靜かに幕）

ある反抗兒の手紙

一九百二十一年十一月

母上！　私は、此夏全四年振りで鄕里へ歸つて、あの退屈な廢滅にも近い城下街で、極めて無刺激な二ヶ月餘りの時日を送つて來ました。其際、姉の家、――此場合、私が姉と呼ぶのは、私と共に、あなたといふ母胎を蹴破つて、此の世の中に生れ出たF姉のことを指すのです――で圖らずも、あなたの、お寫眞を見出して、それを歸京の際、町に一軒きりない、N寫眞館に、複製を依頼して置いたのです。處が昨日漸うその寫眞を送つて來ました。それは極めて質素な、あなたの半身像です、元々あの寫眞は、私と、あなたと、川島の英夫とがN市の展覽會を見に行つた時、三人が城山公園に白い幕を張り廻して、開いてゐた早取り寫眞館で、殆ど戯れとも云へうるほど輕い氣持で撮つたのですから、燒き付けもさう完全なものではありませんでした。併もその中から、あなたお一人だけを、抽き出して、新に複製したものですから、極めてばつとした、漸うあなたの輪廓を伺ひうるに足るといふ程度のもので

す。先づ目に映るものは生へ際の薄いあなたの、ちゞれた髪の毛です。それから上下とも抜け落ちて了つたあなたの歯の中で、一枚きり残つた上顎の右の糸切歯が、薄い上唇を心持突き上げてゐるのです。それが、けつそりと、頬の肉の凹んで見える顔全體に、ほんの僅かな不調和を示してゐます。が是れが又、全體に亘つて、淡い印象より残らないあなたの影像の唯一つの特色でもあるのです。鼻の兩側には微かな二筋の線が走つてゐます。眼は完全に、見開いてゐるのは、片目だけで、右眼は、原版が磨滅してゐたためか、開いてゐられるとは信じられないほど不鮮明です。が、とにかく今私の机の上に置かれてゐる、貧しげな、老婆の影像は、紛れもなくあなたの、晩年のそれであります、

母上――、この寫眞を撮つたのは、あなたがお歿りになる二年前、確か私の十七の年でありましたから、今から、數へて見ると、丁度十年以前の事であります。何んといふ早く流れ去つた月日でありませう。最もあなたのお歿りになつたのを前後として、產聲を上げた、姉の長女のS子は、最う今年九歳で、尋常科の二年生なのですから、そして又、不可思議なことには、此S子一人だけが、――事實姉の肚からは引き續いて四人の女の子が生れ出てゐるのです――可笑しいほどあなたに似てゐるのです。顔の輪廓でも、音聲でも、痩せてひよろりと高い體付でも、思ひなしかその樂天的な性質迄が、あなたを彷彿させるのです。それで私の妻などは――あなたはまだ私に妻と呼ぶ女のあることを御存じありませんでしたね。是は後で詳しく申上げます――、あなたのお寫眞と、S子とを見較べて、まるで、S子が、あなたに生き寫しだといふのです、それから後は、S子ちやんと呼ぶ代りに、「お婆さん――お婆さん――」と呼ぶのです、最も、之はS子が痩せて、ひよろ長いといふことを、からかふ意味も含んでゐるのですが――で私は、あなたの死後六ヶ月目で此の世の中に生れ出たS子が、あなたに生き寫しだといふ事實を、果して近時の科學の敎へるやうに、その異常なる精神的感動が胎兒に感應するといふ說に當箝めて考へることが正當であるかどうか、それとも又、もつと深い或ものの、意志の發現として見ることが正しいかどうかを知りません――が、事實、S子があなたに生き寫しであることは爭ふ餘地がないのであります。それから次ぎづぎに生れ出た姉の四人の子女は孰れも健やかに、生長してゐます。S子の下に六歳になる、薫子、四歳のみつ子とそれから去年の二月生れた、ぎん子の四人がそれです、姉は四人の

子女の母として、貧しいながら、極めて幸福に、あの故郷の町に日を送つて居ります。

母上――、姉の事をのみ申し上げて、私自身の事を申上げるのを忘れて居りました。八年前の忘れもせぬ、三月の廿一日、丁度彼岸の中日といふ日に、あなたが永遠の樂土に上られてからの月日が、私に取つて、何れほど、忍苦と、絶望と、奮鬪との、そして又今にして思ひ返せば、泪含しいほど感激に充ち充ちた月日でありましたらう。あの當時、實に、思ひも寄らない急激な、あなたの死から受けた私の心の打撃は、性來の私の沈默癖をいやが上に助長させて、ともすれば暗い憂鬱な影さへ自分の性格の上に陷ちかゝつて來るのを認めずにはゐられませんでした。あなたから享けついだと信じた、かすかな性格上の明るさすらも、灰色の一色に塗り潰されて了つたのも其頃なのであります。沈鬱な裡にも、未だ失はれずにゐた純粹と、善良とが、影を潜めて、妙にひねくれた、猜疑深い性格の所有者として、私は新しく渦卷き下る濁流の眞中に突き放されたのであります。併も此濁流の中に立つて、再び起つことを許されないほどの深傷を負つた私が、彼岸に在る運命の扉を、自らの手で打ち叩くために奮然と、拔き手を切つて泳ぎ出すまで、それは決して、短い月日ではなかつたのであり

ます。其處には、冷酷と、無情とを巧みに薄い厚意の衣で張りくるんだ僞善者共が、幾重にも私を取り圍んでゐたのでありましたから、實兄と、義兄と、親戚と名告る年長者の群とがそれであります。誠意なき厚意――、かういふ言ひ方が私の思つてゐる事の正しい意味を、あなたにお傳へすることが出來るかどうかを私は知らない。併し是と共通した厚意を、生前のあなたが、矢張り是等の僞善者共から數限りなく賣りつけられ其結果として、しばゞ迷惑を感じられたことゝ思ひます。此誠意なき厚意の押賣りほど迷惑なものがありませうか別しても、厚意を楯にして其人の運命をも狂せようといふに至つては――。一ばん不可ないのは是等の人達が、自分の關與した事の結果に對して、微塵ほどの責任を感じないことであります。此場合非凡な天才か、圖拔て强固な意志の持主であつたなら、何れほど歪み初めた運命であらうとも、何れほど重く蔽ひ被ぶさつて來た桎梏であらうとも、刎ねのけること正しく狂ひを戻すことも、不可能ではないかも知れない。だがもし、それが微弱なる個性の持主か、子羊のやうに柔順な少女であつたとしたら――。

母上――、さういふ犧牲者の一人に私は千葉の姉上を當篏めて考へて見ることは、許されな

いことではないと思ひます。十六の年にあの山深い開墾地に追ひやられて、忍従と、貧苦と劇しい勞働との間に、三人の子女の母となつたあの姉上のことをであります。三四年前に一度私が訪ねた時、姉上は泪ながらに言はれました。

「あの時、反對された母上のお心が今初めて解つた、その時母上のお言葉を受け入れないで兄姉の說に從つたばかりに、とう〳〵私の一生は滅びに陷ちたのだ、何うかして鄕里に逃げ歸らう、逃げ歸らうと思てはゐるが、何しろ十六の年に此山の中に押し込められたぎり、向ふに見えるあの松山から外へは一足も踏み出したことがないのだから、そのうち子供はだん〳〵殖へて來る。今となつては私の體は、鐵の鎖りでつながれてゐるやうなものだ」と、何といふ悲痛な告白でありませう。姉上は、あなたとは血緣として何の關係もありません、寧ろお二人の關係は、なさぬ仲のそれであります。そういふ意識が、あなたの誠意ある厚意を正しく姉上に徹底させなかつたばかりでなく、血緣である長姉や、實兄等の誠意なき厚意をその場合の、姉上はより尊く、より眞實らしく思はれた所以でありませう。私たちの從姉であり、同時に姉に取つて姑である千葉の家の主婦の、老いて尙斗酒をも辭せぬ傲岸な性情

と、弱々しい姉上のそれとに思ひ及んだとしたら——姉上の上に來た今日の恐怖すべき、破綻は、母上ならでも其初め少し心あるものゝ胸に豫感されない譯はなかつた筈です。

母上——、思はず申上げることが、傍道へそれて了へました。千葉の姉上の近狀を申上げたのは私の次に書きつけやうとする事象の上に、一段効果を深めようといふ目的に外ならなかつたのであります。

偖、私達一家の中でもし此不遇な姉上に運命の類似點を求め得るならば、それは私なのださうであります。何故に私は此場合「さうであります」といふ推定を用ふるのであるか、是は私の新らしい發見ではなく、又事實私がさう感じてゐるのでもないからでもあります。左に掲げる實兄克己の、最近の手紙の中の一章を御讀み下さらば自ら明白に理解出來得ることゝ思ひます。「父の死、一家の離散、加ふるに母の盲目の愛の犧牲者に擧げられ、誰一人顧みるものなき內に成長したる愼一郎は、千葉の小千代に次ぐべき不幸者に有之候云々」私が果して、不幸者か何うか、それは今こゝで改めて穿鑿する必要もないことです。が此言葉が實兄とは言ひ、私に取つて異腹の兄上の言葉であるだけ其處に、新しい興味と、別個な意味を

發見しずにはゐられないのであります。私に取つて、如何なる意味に於ても味方でない實兄の眼にすら、「不幸者」と映つたほど逆境に立つてゐた私が、混沌たる濃霧の彼方に自分の爲に備へられた王國を見出す迄の道程と、その王國の最初の一段に辿りつく迄の惡戰、苦鬪、而して血塗みれの手に白刃をつき立つて、初めて此王國の上から莞爾として、既往を振り返つて見た私の眼に、嘗つてあなたの胸に顏をあてゝ、漸う乳房を探し當てた瞬間のあの純情と天眞なる悅びの光りとが果して宿り輝いてゐたかどうか――、

母上――愚かしい、私は、外にいと高きものを求め喘いでゐる間に、自分のうちなる最高なるものを何時か根こそぎ失つてゐたのではなかつたでありませうか。

母上――私の血稅によつて贏ちえた、いと低き名譽と、地位、そして又藝術家としての微弱なる敎養、それは實に、反抗の所產であります。小さくは血緣に對する反抗、大きくは不合理なる社會的階級に對する反抗――がそれであります。その當時私の、指導者であつた長上の人々の誠意なき厚意の危ふく犧牲となり、實兄の所謂「小千代に次ぐ不幸者」として葬り去られようとした時、我れと吾が運命の上に落ちかゝつて來た惡魔の手を刎ねのけて、奮

然と自已本然の道に驀進した私の力と、勇氣とは、極度にふみにじられた者の裡にのみ、よく湧き上るといふ底知れぬ反抗と、復讐心との結晶であります。眞實に孤獨を痛感したものゝみ、絕對の强者である――といふ言葉は、あなたにお別れした後の私に取つては、爭ひ難き眞理であつたのであります。

母上――私は、改めて實兄の說明を受ける迄もなく、自分と千葉の小千代姉とをしば〳〵思ひ較べて見る瞬間があります。それは、此不幸な姉上と、自分の運命が類似してゐるからといふやうに意識的にではなく、極めて無意識の裡に、自分の辿つて來た遙かなる月日を、思ひ追ふ瞬間にであります。それは、必らずしも彼女の狂ひる運命が、彼女一人の運命ではなく、虐げられた全日本の女性が負はされてゐる不可避的な運命であるからであります。自分の本然の姿を、私が自分の力に依つて守護し得たと信じたことが、此處に至つて大なる間違ひであつたことに思ひ到らずにはゐられません。私にとつてそれが、たとへ半生の血稅によつて辛じて贏ち得た王國であつたにもせよ、それが決して自分自身の力によつてのみだと自負するほど私は思ひ上つてはならない、何故なら、私はあなたといふ母胎を蹴破つて、此世

の中に生れ出る時、既に小千代姉よりは、幾十倍わりのいゝ男性といふ強味を背負されて來てゐるのですから。性の上で弱者として生れついて來た姉上の、他人の意志のまゝに自分の運命をゆだねて行つた忍從の生涯を思ひば、實に他人事とは思はれない、恐怖のひし〳〵身に迫るのを覺えずにはゐられません。

× × ×

母上――、今朝の新聞紙の報ずる處によりますと、もう北の國には二尺餘の積雪があつたといふのではありませんか、低い灰色の空が押し被さるように、町の上を包む、長い退屈な冬の日があの故郷の町に今年も又訪れようとして居ります。今小さいながらも、二人の愛するもの、運命を擔ふべき一ッのねぐらの主として、一人の子の父として遠い少年の日の、故郷の家の狀を思ひ廻らすと、夢のやうに淡いその一ッ一ッの場面が今日迄に計り知ることの能きなかつた、新しい意味を私の胸に私語いて呉れます。私の物心づく頃の故郷の家の狀態は私の胸に、決して明るい感じを以つて甦つては來ません。それは暗い濕地のやうにじめ〳〵した感じです。其處には絶へざる感情の衝突が、默闘が、行はれてゐました。あなたと、そ

して姉上たちとの唯み合ひがそれです。さうした場合、私自身が何ういふ立場にあつたか：又さうした唯みあひの中心點が、都築家を私に相續させようとしてゐるのだといふ姉上たちの、あなたに對す猜疑や、邪推にあつたなどとは、數年の後、その當時のあなたの唯一の、味方であつた古谷の叔母上の説明を聽く迄は、思ひもよらなかつたことであります。微塵ほどの愛情なくして、親と呼び、子と呼ばなければならない異母子の關係ほど、呪はれた存在が他に在りませうか、併りあなたは知らない人の遺して行つた六人の子女の新しい母として、都築の家に嫁いで來られたのではありませんか、そして又、晩年のあなたが僅かに私にお洩らしになつたお心持から推して考へて見ることを許して下さるならば、一生の間に一度自分の血を傳へた嬰兒を抱きかゝいて見たいといふ切なる願望の爲に、自ら進んで此呪はれた母子の關係を結ばれたのではありませんか、女の四十といふ初老に近い年齢に及んで、血を分けた一人の嬰兒を抱きたいといふ願ひの爲めに、主婦とは言ひ、召使であり、裸母でもあらねばならぬ北國の、貧しい農家へ、併も、六人の異母子さへあるに、嫁いで來られたあなたの、御心情を忖度し、批判するの潛越さを敢えて此處に繰返したくはありません。又十六を

頭に六人の子女が假りにも母と呼ばなければならない新しい主婦に對して、何れほどの扱ひをしたか、私は今こゝに事新しくそれを書き記す必要をもちません。何故なら私は、あなたが並外づれた受苦と、忍從との數年の後に、あなた御自身にとつての最も大きな、如何なる屈辱をも忘れ得るほどの願望を、完全に摑んで居られた事を知つてゐるからであります、四十一歳の夏私のF姉を產み落されて、四年後に又二度目の出產をされたことがそれでありまし。事實私は、あなたの四十五歳の時に、あなたの第二子として、此地上に生を享けたのでありました、あなたに取つて異母子であり、私に取つて異腹の姉上である人達は、私が尋常科の一年生として、村の小學校に通ひ初める年頃には、一番上のS姉を初め次ぎ〳〵に、新しい家庭の主婦となべるく町の方へ嫁いで行かれました。

母上――、明治維新の社會組織の急激な變動は、無數の半身不髓の農夫を作り上げました。私達の父上も明かにかうした農夫の一人であられたことは事新しく書き記すまでもありません。工場の經營、銀行の設立、其他種々な新事業の狡猾な經營者にとつて、善良で遊墮で利殖家である農夫ほど、理想的な餌は他に求めえないのであります、私の記憶に在るだけても

父上が關係された事業の數々は、双手の指を折つても餘るほどであります。藏の中の傳來の寶物、たとへば、鎧だとか、刀劍だとか、書畫だとかは、一品づゝ影をひそめて行きました。學校の歸りに熟れる日を待つて、自家の畑の西瓜をもぎ取つて、何時の間にか變つてゐる知らない、その畑の持主に怒鳴りつけられたのもその頃です。漸う長年間の異母子とのいきさつから脫却されて、ほつと安息の吐息をつかれようとする頃のあなたは、今又新しく迫つて來る貧困の波を、眞向から浴びて、傾きかけた都築家の石礎をお一人で支へられなければならない勇敢なる闘士でした。何故なら、其頃父上は、遺傳性の半身不髓でづつと病褥に親しんで居られたのですから、あなたは、病める良人と、私達二人の姉弟とを抱いながら、毎日のやうに押かけて來る債鬼にも當られなければなりませんでした。それからたとへ僅かばかり殘つた田畑に、蒔き、苅り、喰ふ米麥であつたにもせよ、長い都會生活の後のあなたに取つては、容易な事ではなかつたこと、思ひます。ましてその中から、父上の藥餌と、兄上の學資とを生み出されるといふことは。

母上――、私の少年の日の記憶の中で最も慘しい印象の一つとして、それが丁度吾々の記

憶の中のある一つの場面が、しば〳〵何の連絡もなく、擴大された活動寫眞の畫面のやうに、くつきりと浮び上ることのあるそれのやうに、あなたと、父上とのいさかひの場面が、目の前にまざ〳〵と浮び上つて來ます。それが何に原因しての、いさかひであるか、今思ひ究めるべく、餘りに印象が部分的であります。たゞかうした爭ひの後お二人共定つて默し勝ちの數日間を過されたことは、それが極めて暗い感じの伴ふ記憶として、殘つてゐるのみであります、其當時の私に取つて、最も畏敬すべき、同時に恐ろしい人として、印象されてゐたのは醫學生として、東京に遊學して居られた兄上であります。とは言ひ、それは數年後の私が兄上に對して抱くようになつた、冷やかな、寧ろ反抗から來る敬遠のそれでなく、其處には多分に、肉親に對する親しさと、長上に對する盲目的な尊敬とが交つてゐたことは事實であります。

母上！　是程の思慕と、尊敬とを拂ふことを惜なかつた私が、漸次、兄上から遠ざからうとする心持の兆し初めたのは、父上の死の前後からで、あなたにお別れする頃、卽ち私の十八九才の頃は相互の感情は反感の頂點に達してゐたと言ひうるのであります。私が小學校を

卒へて、町の程度の低い、實業學校へ通ひ始めた年の夏、私の生涯に取つて、最も悲しむべき最初の試錬の手が用捨なく私の上に被ひかぶさつて來ました。父上の死がそれです。當然私の踏むべく備へられた道、――それへ引戻すべく數年の時日を費さなければならなかつたほどの、私の運命の狂ひは、實に其時に端を發したのであります。何故なら、父上の死後私たち一家の全權は、姑息で、利殖家で教養のない義兄Sの手に移つてゐたのですから。私は直ちに學校を罷めなければなりませんでした。それが學問好の少年に取つてどれほど悲しみの極みでありましたらう、此事には無論兄上も關與されたことゝは思ひますが、當時習志野で二ケ年の現役に服務して居られたのですから、表面私に退校を迫つたのは義兄Sです、彼の態度は、殆ど無慈悲なる命令者のそれでありました。私が此義兄を、自分の運命の最初の攪亂者として、憎惡と反抗とを以つて、眺めるやうになつたのは、明らかにその時からであります。若し當時の私の周圍の中に、目覺めようとする私の心靈の、眞に求めるものを少しでも思ひ究め、それに向つて、針路と、鞭撻とを與へようとしたものがあれば、それは尤も無智にして、不明である可き筈の母上お一人でありました。それは、眞に愛するものゝみが感

じうる慧智と、聰明とを超絶した直感です。併り、あなたは眞に私の求めるもの、何んであるかを知つて居られました。それは、私が廿七歳の今日に及んで、初めて發見した新しい驚異であり隨つて生前のあなたに對して少しも謝したことのない感謝であります。とは言ひあなたは、私の運命の鍵を開いて下さるにしては餘りに無力でした、無智でした。私の最初の首途として、N市の××新聞社の附屬印刷所の見習職工を選ばれたことは、その間の消息を最も明瞭に、適切に語るものであります。「學問とは文字を覺えることだ、活版所に行けば文字を覺えることが能きる」こうしたあなたの子供じみた所信が、どれほどあなたの無智を證明して居ようとも、私はそれに對し微塵ほどの輕侮も、感じはゐたしません。どれほど誤つた手段を私の爲に選ばれたとしても、私はあなたのお思召の深さを思ひ返す毎に泪含まずにはゐられないのです、幸にして私の活版所生活は、二ヶ月で了りました。それから、五ヶ年の後、あなたの死を境として、あらゆる羈絆と情實とをふみにじつて、勇敢に、自分の運命の扉に打ち突つて行く迄の月日を、どれほどの侮辱と、虐げとの裡に、生長しなければならなかつたか、今眤つと机に倚つて、靜かに思ひ廻らせば、薄暗い製糸工場の、野卑と、みだらな空

氣の中に、又東北のある老舗の店先きに、かと思ふと、都會の郊外の、ある齒科醫の診察室の中に、いつも、陰氣な、小蛇のやうに、猜疑深い瞳を、見据えてゐる少年の日の自分の姿が眼前に浮んで來ます。そして、是等の總ての追憶の場面に牛虱のやうな、執拗さを持つて附き纏ふ二つの影像を認めないわけには行きません。兄上と、義兄のSとがそれです。是等の人達は何が私に取つて、必要かを思ひ究める前に、私に一つの職業を與へることが最上だと信じたのです。それは私に對する厚意若しくは、惡意に依つてゞはなく、彼等の習慣から長上としての義務だと、信じたのです、私は今吾々の時代に、無數に行はれてゐる一つの誤謬に就いて、それは決して私の新しい發見ではなく、極めて、平凡な判りきつたことなのですが——こと更に、聲を大きくして、叫ばずにはゐられないのです。卽ち、吾々が、此地上に置かれたことの意義は、各自が自分自身の生活をするにあるといふ平凡な眞理を、誰れも彼もが、氣づかずにゐるといふことです。自分の與へられたものを、完全に生かしきること——此簡單な事實を、人生の第一歩に誤つたなら、その人がどれほど辛苦を嘗め、富や、名譽を築かうとも、それは、砂の上に建てる樓廓以上ではないといふことです。圖拔けた才能

の所有者なら、どれほど、誤つた場所に置れても、自分の個性を伸ばしきらずにはゐないでせう、がもし微弱な個性の持主であつた場合は、習慣と、周圍が其個性の芽をつみ切つて了ふといふことは、例をさして遠くに求める迄もありません。だが併し、吾々が自分の全精神を打ち込むことの出來る仕事――、それを見出すことが、さう容易なことでありませうか、況して、その指揮者が、まるで無省察の裡に、その被指揮の運命を左右するに至つては。彼等は、先づその少年の爲に、醫者とか、軍人とか、商人とか勢少くして、功多きを撰ぶ――それは、その少年の本質の爲にではない、第二義的な目的の爲にである、パンの爲めにである。これは、その第一歩に於て、其子弟を、墮落に導くものであります。各自が眞に、自己の才能を生かし切ること、そしてその完成された技能が共同生活に於て、他に働きかける場合――そこに初めて、本當の合理的な職業が生れる。即ち各自に、眞に自己を完成させることは正しい立派な職業家卽ち專問家となることに外ならない。此場合の職業とは、在來の意味のそれではなく、職業――即ち、藝術とも言ひうるのであります。千葉の姉と共に此懇るべき誤謬の犧牲者の一人として、葬られようとした時、私は自分の心の奥に、微かながら

も、否々といふ囁きを聞いたのであります。其當時から私は、非常に現實を厭ふ空想好きな少年に變つて行きました。現實に充たされない心の空虛な充たす爲に、種々な書物を貪り讀みました。多くの英雄や、好奇的な物語りの主人公に、自分を擬して、心私かに、ほゝ笑んでゐたのもその私です。天才の傳記を讀んで一夜の中に、自分を大天才に近い人間だと思ひ込むほど愚かな少年でしたもの。それは私の初期の熱病時代とも言ひうる時代です。かうした私は、兄上や、義兄の選んで呉れた場所に一年間と留つてはゐませんでした。『尻空き』、それが當時の私に對する誰れも彼もの使つた代名詞です。其結果はあなたに對する彼等の反感です。

「後家育ちだから、愛に溺れてゐるから」其當時。長年來棲みなれた家を營んで、義兄の家に子守同樣に引き取られて居られたあなたが、此一人の子の爲に、どれほどの引け目と氣兼ねとを彼等の前に感じられなければならなかつたか、都築家から上る全部の收入を自分の手に收めても、尙且つ、晩年のあなたに、煙草錢にもことかゝせたほどの侮辱と、冷遇とを敢てしたSが、ひつきりなしに町の理料店の暖簾を潛つてゐたことは、周知の事實であり

ます。當然、あなたを扶助すべき筈の兄上は、勉學にことよせて、省みられようとはしなかつたのです「愼一郎が私の意に從はなければお母さんを見て上げる譯には行かない。」私が彼等の意を迎合しない時、かういつて、責めつける言葉ほど、私に取つて、苦痛を感じさせ、反抗力を失はせるものは他になかつたのです。あなたが、私のために、Sの前に氣を兼ねられると同樣に私も又、誤謬を誤謬と知りつゝも、Sの命令のまゝに第一から第二、第三と意に充たない工場へ、商店へ、轉々と移つて行かないわけには行かなかつたのです。

母上――、此處に一枚の繪があります、鎖の兩端に繫がれた二匹の小犬が、一人の飼主から別々な方面へ歩むべく苛酷な鞭を加へられて、相互に、引きつ引かれつしてゐる畫面です。たとへば當時の私達親子は滑稽のやうで、何處か笑ひない處のある此繪畫のやうなものではなかつたのではありませんでせうか。

母上――、私が明治廿五年二月十一日の黎明にあなたのお體から離れた時が、私の肉體の誕生であると同時に肉なるあなたにお別れした日は、明かに私の靈魂の生誕日であつたのであります。事實、私はあの日を境として、初めて本然の姿に還ることが出來たのです、私はあ

らゆるものから解放されました。都築家も、兄弟も骨肉も、一切を拂ひのけて、自分の本道を慕地につきす、む勇氣と力とを感じました。私はもはや、あなたの死かばねの前に、泣き悲しんでゐる弱々しい少年ではありませんでした。私は文字通りの反抗兒だつたのです。反抗――是こそ私の唯一の旗印だつたのです。私の愛するもの、晩年を極度に虐げ苛なんだものに、私の過去を滅びにつき落したものに、それをよしとして受け入れてゐる社會に――。『愼一郎も、馬にも牛にも蹴られない年になつてゐる、あれのことは少しも氣がかりではない』之はあなたが臨終に際して、兄上に殘された最後のお言葉です。それが、なさぬ仲の兄上の前を繕らうためのお言葉であることを知れば知るだけ、私は此短いお言葉の裡に、あなたの汲みつくせぬ深い恩愛も、叱咤も、鞭撻も、感じることが能きたのであります。爾來八年の歳月は流れ去りました。忍苦と、精進不撓なる意志、それこそ眞に、虐げられたるものの反抗の唯一の信念でありました。

母上――、私は今、いと小さきねぐらの主として、二人の愛するもの、、全運命を背負つて居ります。そして、名譽ある藝術の殿堂に參ずる選ばれたる戰士の一人として、その第一

歩を果て知らぬ曠野の一角に踏み入れようとして居るものであります。當然狂ふべき運命をとにもかくにも、自己本然のそれに引き戻し得たことは明かに愚かしき私に取つて、過當なる幸運であり、名譽であります。とは言ひ私は徒らに、此幸運と、名譽とに、甘いるものであつてはなりません。私は此選ばれたる名譽を、いと高く、價値づける爲に、又平凡にして、感謝されることなくして終つた、あなたの御生涯を、深く意義あらしめる爲に、たへざる精進と。自己鞭撻とを以つて、自分の信ずる道に、よりつき進むことこそ、子としての私の正しい奉仕だと信ずるものであります。さらば天なる母上よ——。

附記。此作は夭折せる友人M・Hの手記を骨子としたものである。作者。

久遠の戀人

千九百二十一年八月

——ある少年の友へ——

其秋、私は三年振りで懐しい故郷のF町を訪ねる爲めに東京を發つたのであります。信越線下り列車が數の多い碓井の隧道を拔け切ると、あの隧道内の一種不快な空氣の壓迫や温氣や、響音やに倦み切つた乘客の前に、四邊の世界は全くからりと夜の明け放れたやうな明るい廣々とした光景に變つて來ます。それが若し、夜十時か、十一時近く上野譯を發する夜行列車で發つたとしたら、實際あの隧道を拔け切るのを界として一齊に文字通り夜の幕は切り落されて、窓外には水々しい高原の黎明の場面が描き出されます。恰度其時、私の澁い假睡の後の眼に映つて來たのは此光景であつたのです。霧、あの神秘的な水蒸氣の密集團は、到る處の谷間や、山襞や落葉松の密林から誘ひ合ふやうにしてゆら〳〵と立ち上つて行きます可愛らしい月見草は、水淺黄の空に薄れて行く星影にあこがるゝものゝやうにぱつちりと眼をみひらいてゐます。

お、私の久遠の戀人よ！

其時肌に迫つて來る嵐氣を耐へ忍びながら、車窓に半身を乘り出して、刻々眼の前に描き出される變化に富んだ此光景にみとれてゐた私は、思はずかう叫んだのであります。元より詩人でない私は、かう絶叫したことが、あの高原を賞め讃えるに應しい言葉であるかどうかを知りません。又私の刹那の感激から來る誇張した心の叫びであつたかどうか、私は今それを思ひ究めようとは素より思ひません。たゞそれは、其場合、廿二歳の青年の眼に映つた美しい一つの幻影として永久に私の胸に生きてゐればいゝのであります。其後ち、幾度も其處を往復した私の眼に、果して其光景が私が其時叫んだやうに「久遠の戀人」として映つたかと言へば決してさうでは無いのでありますから。其時私の眼は、吸ひ寄せられるやうにあの淺間の傾斜から輕井澤高原へかけての大展望を瞶めてゐたのであります。霧の帶の薄れて行くに從つて、淺間の全姿は、くつきりと眼前に現れて來ます。火を噴くが故に私は淺間を愛するのではありません。高山なるが故に愛するのでもありません。あの雄大で崇厳の中に平和な趣きを含んでゐる全山容を深く愛するのであります。

汽車は緩やかな斜面を徐々として進んでゐます。右の方遙かの地點に、小さな箱のやうな白堊の家々が指摘されます。輕井澤です。もう私の躰は完全に懷しい鄉國へ運ばれてゐるのであります。かう意識する瞬間から私の胸は異常な亢奮に充たされます。故鄉、私の兄姉、私の生れた家、父母の墳墓、幼き日の友、追憶の糸は纒綿として盡きないのであります。汽車が輕井澤驛に滑り込む頃は夜は全く明け放れて居りました。

「壽司にあんぱん、新聞に牛乳・・・」高い賣子の呼び聲は廣いプラットホームに響き渡つて、旅人の心に一種物なつかしい感じを湧き起させます。

あゝ故鄉、故鄉、長い間他鄉に放浪してゐたものゝ胸に此言葉はどんなに魅力ある響を以つて迫つて來ることでありませう。新聞賣子のアクセントにさへ鄉國の人に特有な、もの懷しさがあるではありませんか、此んな時、鄉國の新聞の一枚も買つて讀まうといふ氣になるのはつまり人情であります。

「おい××新聞」其時私はかう故鄉の新聞で最も馴染の深い新聞の名を指して、賣子の手からそれを買ひ取つたのであります。座席に返つた私は、懷しい紙の匂ひをさへ嗅ぐやうにして

先づ最初に三面を擴げて大見出しにさつと眼を通したのです。何處の縣下にもよくある情婦斬りや、心中未遂やの記事が冷酷な記者の手に依つて、何等の同情も、責任觀念もなく長々と、誇張して報じられてゐるのでありました。それから眼を順に下段へ移して行つた私は、次の一行に瞳が打ちつかると、まるで打ちのめされたやうな衝動に打たれて、思はず紙を其處へ取り落したのであります。あゝ其時私の讀まされた事實は何んといふ恐ろしいことでありましたらう。二難活字の見出しで、狂青年自殺云々の題名の下に記された、阿部信之といふ青年は忘れえぬ私の鄕友であつたのです。人間の死といふものは何んといふ無雜作なものでありませう。親しい者の上にさへ何等の靈的感應もなしに、一瞬の間に行はれるといふことは。此新聞紙の報ずる所に依ると友は昨日の午後、私が旅仕度に熱中してゐた四時前後に、瞬間前に私をして「久遠の戀人」と叫ばしめた、あの火山の墳火口を目懸けて飛び込んだのであります。私が友に最後に逢つたのは、確か三年前の秋、其頃脚氣を患つて故鄕の町の姉の家に歸省してゐた時であります。

其頃姉の家では自家ものと、少しも別け隔てなく至極氣樂に住まはせて呉れたのでありま

した。永い間家庭の温味を知らなかつた私が、どうやら家庭の人らしい氣持に返つたのも其頃でありました。それにも關らず私は周圍の何人とも談話を交はさないで、一人すねたやうに、書齋の中に過ごすやうな日が多かつたのであります。此町に一人の友を持たない私の生活は、全く堪へがたく無聊なものであつたから、此んな時寂しくなるとよく夕暮の一時を盜んで、町から十丁程離れた山裾の傾斜地に在る私の生家の近くを彷徨ふのでありました。さうです、私は何んといふこともなしに、あの古い家の四邊をさまよふことが好きでありましたから、勿論生家といつても、其處には私の骨肉の何人かゞ住んでゐたのではなかつたのです、が私の少年の日の夢を育ぐゝんで呉れた、あの古い家の周圍には、何かしら私を引きつける不思議な力を持つてゐる目に見えないものがありました。何時行つて見ても、泉水には水が湧れて筧さへ完全に架つてはゐなかつたし、家を圍んでゐる土塀は傾きかけた儘になつてゐて、あの通りから見える堀の周圍の松や、碧梧桐は何時の間にか切り倒されて、少年の日に見た庭園の面影は何處にも殘つてゐなかつたのです。それにも係らず私はあの邊の小徑を歩き廻つた後に、一人ぽつねんとあの堀端の石の上に佇んで、刻々暮色に包まれて行く水面を瞶めてゐる

のでありました。私はどんなに幸福だつたでせう、此んな時私の空想を掻き亂す何物かゞなかつたら・・・だがしかし、かうした私の法悦とも言ひたい心の狀態は、三十分と保ちえらるゝものではなかつたのであります。何故なら、其處には定つて、此氣違ひ染みた私の姿を見咎めずには措かない舊知の何人かゞあつたから。實際是等の人に取つて、殆ど十年振りで見る私が、自家と云つても他人の家と少しも變る所のない此家の門邊に、別けても夕暮を選んで佇んでゐるといふことは何等か、異樣な感じを與へないでは措かなかつたに違ひないのであります。私は無智な農夫の厚意に、素朴な愛すべき多くのものを見出しうることを否定しはしない。が無批判な彼等の厚意には時として、迷惑な結果を受けることがあるものであります。

或夕方、此堀端の石の上に佇んでゐる私の背後から、

「お前さんは、茂樹さんだいな、まあ、」

かう私の名を呼びかけるものがあつた。其聲は殆ど記憶の底に殘つてゐるとは思へないほど遠い昔に聽いた聲の一つであつたのです。其時過去の追想に耽つてゐた私に取つて、それはまるで懐しい追想の中の何人かゞ、現實へ舞ひ戻つて自分を呼びかけてゐるかのやうに思へたのであります。チラと私は振り返りざま其人を視た。

「お小夜だつ・・・・。」私は咄嗟の間にかう思つて、少年の日の自分の守であつた彼女の乳呑兒を抱いてゐるやうな姿をしみ〴〵と見入つた。

「お小夜さんでしたね。」私は改めて念を押したのであります。

「矢張り、茂樹さんだに、今時分此んな處に何にしてゐなさる、妾等お借りしてゐても、此處はあんた、自分の家だもの、中へ入つて休んでゐなさりあいゝに、そりやあんたちの小さい時のやうに綺麗ではないけれど・・・・。」

彼女の明け放した調子には幼時の私に對すると、少しも變つた處がなかつたのであります。

「いや僕は家へ入るより、かうしてゐる方がいいんだ。」かう私は答へたのでありますが彼女はそんなことで許さうとはしなかつた。

「どんなに私等貧乏してゐても、不味いものだばかり食物は澤山ありますだ、さあ中へお入んなんし。」

私は彼女に從つて懐しい此家の十年前に死んだ父親の表札の、未だに掛つてゐる大戸の前に

立つた、家の中は昔の儘だあつた。爐には鐵瓶が掛つてゐた。神棚も、明り窓も、流し下へ通ずる障子も十年前のまゝであつた。たゞ私の少年の日よりは、一層凡てのものが煤色を帶びてゐたのであります。

彼女は鐵瓶の下に楷を折りくらべ乍ら、

「茂樹さんのお友達の信之さんは、ほんとうにお氣の毒だし、あの勝治さが歸つてから物置の方に繋いで置くさうだに、それに此頃ぢや、あの弟迄が撲つたり、蹴たりするんですぞ．．．」彼女は艶のないそば粕の多い燻んだ顏を、傷ましさうに顰めながら、友の消息を語り聞かせて呉れたのであります。それまでとて、決して私が友のことを忘れて居たとか、疎かにしたとかいふのではなかつたのですが、故郷に友を持たない私は唯一の友人である、彼が宗教上の懷疑から發狂した後は殆ど誰からも消息を聞く術がなかつたのであります。發狂したといふ噂の立つた最初の一二年は、遠くで受け取る友人の手紙から私は狂人らしい何物をも見出すことが能きませんでした。實際、此年少の友の手紙から其當時の私がどんなに啓發される多くのものを見出すことが出來たでありませう。彼の底知れない文學的教養と、透徹したもの、

觀方とには、全く十六七の少年とは思へないほど多くの天才的な閃きがあつた。「喜びの最中にも時は行く、有難きかな、悲みの最中にも時は行く有難きかな、人間の感情や、理性が生活の三角稜を通して死の日迄吾々の前に作り出すライフの虹よ、祈禱の心、信仰のエネルギー、こつれあてこそ人間萬歳、神萬歳。」こんな手紙が届くかと思ふと、「神の聲天地に聞ゆ、惡鬼も之を聞きゝては立ち處に逃げ行けり。」といふやうな奇怪な自作の讃美歌が二つも、三つも屆くのでありました。實際此頃から私の受ける友の手紙には、確かに思想の統一を欠いた點が多くなつたやうに思はれました。果ては混亂した思想の狀體は文字の上に迄現はれるやうになつたのです。例へば極く判り切つた字、感謝の感といふ字の下の心が書き落してあつたり、何時も何かに急き立てられるやうな氣持で、急いで書くものと見えて、一頁に三字も四字も脫字があつたりするのでありました。加之友は常に鉛筆を用ゐるので、字が抹消して讀めない個所が多かつた。「太陽を綠色だと言つた學者があるそうだが、近頃僕は人間の視覺の往々信じ難きことを發見する。例へば汽車の走るのを進轉すると見るは明らかに一つの錯覺にして、汽車は寧ろ逆轉するものではあるまいか、」私が此謎のやうな友の手紙を受け取つ

たのはA鑛山の鑛石を運ぶトロッコの下に篏つて全身血塗れになつた友を、F町の病院の一室に擔ぎ込んだといふ、友の家人の通知を受け取る數日前でありました。其頃郷里から十五里ほど離れたN市にゐた私は、其日のうちに友の横つてゐる病院の一室を訪ねたのであります明るい病院の一室で、私は頭のてつぺんから右の脚先きまで、白い布に包まれて、充血した目ばかりキヨロ〳〵動かして寢臺の上に呻いてゐる友を見たのであります。友には母親がなかつた。友が父と呼んでゐる老人は事實は友の祖父に當る人でありました、何故なら、友は友が現在兄さんと呼んでゐる人と、其當時友の家にゐた下婢との間に生れたのであつたから、友の母は產褥を離れると同時に、友の家を放逐されたのであります。友は生れながらにして眞實の父母の名を公然と呼ぶことをさへ許れなかつたのであります。

「眞實に信之はこんなものになつて了いました、」

その時、病人の付添ひに來てゐた友の祖父は、私を見ると目をしばたゝいて言ひ言ひした。周圍に誰もゐなくなると友は私に向つて、「矢張り生に執着があつたのだ　車が來たと思ふと、急に脫がれようといふ氣になつたからね、」眞面目な調子でこんなことを言ふのです、か

うした友の何處からも、私は精神病者らしい何ものをも見出すことが出來なかつたのです。友の祖父の話に據ると、友は其頃家人の目を盜んで家を脫け出して二日も、三日も歸らないことがあつたり、耶蘇は四十日食を斷つたといつて、數日間絕喰したり、或時は野羊へ跨つて天國へ行くんだと言つて見たり、藏の隅や、藁束の影のやうな暗い場所を選んで、聖書を讀み耽つてゐたりする。然しかうした常軌を逸した行爲が多いにも關らず、他人に對して危害を加へるようなことはなかつた。で安心しきつてゐると今度のやうなことになる。「可愛想ですが、今度癒つたら座敷牢にでも入れて置くより道がありません。」涙を拭きながら老人は其時かう附け加へたのであります。其後、東京に出るやうになつてからの私は、種々な生活の繁雜に取り紛れて、友の家に手紙も書かなかつたのであります。私はお小夜の口から其時まで忘れてゐた此友の消息を聞かされて、今更のやうに自分の冷淡な態度を責められたのであります。

「友に逢はう、友はどんなに喜んで自分を迎へるだらう。」私はかう思ふと居堪まれない衝動に驅られて、壯健の日の友に逢ふのと少しも變らない喜びに胸を躍らしながら、お小夜の家

を出たのであります。其處から田圃一つ隔てた友の家に私が行きついたのは、もう陽が全く落ちて了つた頃で、久振りで見る友の家の周圍には、夕暮の故でもあつたが、何處となく陰鬱な影が漂つてゐるやうに感じられた。私は門を入ると、最初に友が檻禁されてゐるといふ門の左側に建てられてゐる物置小屋に近寄つて行つたのです。物置小屋は締め切つてあつた。が手をかけて引くと戸は雜作なく開いた。中は暗かつた。縄仕事をした跡らしく其處へらに藁屑の取散らかしてあるのが小窓から流れ込む一條の光線によつて認めることができた。

「信之さん。」私はかう呼びかけて、此闇の中に友の姿を見出さうと瞳を凝らした。確かにそれらしい黑いもの、光線の屆かない隅の方に動くのを見出たのであります。

「信之さん。」私は再び呼びかけて下駄を脫ぎ捨てると驀地に暗闇の中を突切つた。私は其處に荒縄に簀卷をされて芋虫のやうに横倒しに轉がされてゐる友を見たのであります。

「おゝ。」私は吼えるやうに言つて友に近づて見た。悲しみが一時につき上げて來るのを感じた。私は手早く友の荒縄を解いたのです。

「信之さん・・・・僕だ・・・・」私は友を抱くやうにして言つたのであります。と友は、

「あゝ君か。」無感激な調子で言つた、縄の取れたあとの手の甲の澁りをさすつて、ぼかんとしてゐるのです。私は此友の卒氣ない態度にひどく氣を拔かれたが、友が分明と私を意識してゐないのだと思つた。で

「君、僕が解るかね・・・・隨分久し振りだつたね。」かう言ふと友はそれには答へないで

「君には隨分心配をかけましたね、今日まで僕の爲めにいろ〳〵迷惑なことが多かつたでせうね、許して下さい、僕はもう駄目です、不具者です。」

友は妙に詠歎的な句調になつて此んなことを言ふのであります。

「いや僕は君のために少しも迷惑を受けはしない。それ處かあれから長く手紙を書かないので、君に謝らうと思つて來たのだ。」私はかう言つて、闇に馴れた瞳を据ゑて友の蒼白い顏を瞶めた。然し友は決して相手の言葉を受け入れようとはしなかつた。たゞ自分の言ふ丈けのことを言へば可いといふやうに見えた。私はひどくちぐはぐな氣持と、一方どうすることも出來ない愛憐の情とに充たされて其處を出たのであります。友の縄を解いて、其處から何か恐ろしい結果を生みはしないだらうかといふ危惧に打たれたが、私はそのまゝにして置いた

のであります。それでも友は戸口まで送つて來ました。が決してそれ以上一歩も外へ出ようとはしなかつた。其處を出て主家の方へ曲らうとする時、もう一度振り返つた私の眼に、眼の嶮しくなつた、鼻骨の隆起した友の顔が夕闇の中に見出されたのであります。

不意に私が訪ねたので友の家では、別けても老人は限りなく喜んだ。去年から名古屋の方の新聞の仕事を罷めて家に歸つてゐるといふ友の兄（父）なる當主も其處へ姿を現はした。

「實に信之はお恥いものになつてしまひました。」かう言つて、友の兄は私の前に暗然として頭を垂れたのであります。

「今、一寸お逢ひして來ました。併し縛つてお置きになるのはお氣の毒ですね、あゝまでなさらなくても何んとか、」私が續けようとするのを相手は遮ぎつて、

「年寄りに子供を預けて置いたのが私の生涯の失策でした。いや實に彼奴は私の家の貧乏神です、病氣になつてから五六年間毎日たゞあゝして飯だけ喰つてゐるのですから、私はもうあれを人間として待遇する譯には行きません、あれは獸類です。いや獸にも劣ります。」

「然し……」私は此時友の兄の激した調子に引き入れられるやうに叫んだのであります。

「私はあの頃の信之さんをよく知つてゐます。さうです、信之さんのどんな親しい方より、よく知つてゐると言ひ切れると思ひます。信之さんは確かに天才の芽はあつたのです。伸びようとする芽を成された天才ではなかつたにしても、確かに或意味の天才でした。それは完周圍の方が餘りに氣早に摘み切つて了はれたのではなかつたでせうか、ロシヤの小説に周圍の人の爲に、自己暗示にかゝつて、とうゝ本物の狂人になるといふのがありますが、信之さんのも責任は周圍の方にあるやうに思はれます。」

私は此時、あるロシヤの小説の主人公を思ひ出してこんなことを言つた。老人は老眼鏡の下に目をしばたゝき、友の兄は不興氣に顔を背けました。

「信之さんは、あなた方の肉親の方であると同時に、私にも友人です。そして人類の一人です。あなた方丈けの意志のまゝになさるのは間違つてゐます。私は今信之さんの繩を解いて來ました。」と友の兄は驚いたやうに。

「そりあ飛んでもないことです、あれを放したら。いや、そりや困りました、」かう言つてその時ランプを運んで來た友の弟に、直ちに友を縛つて來るように命じたのであります。そし

て

「成るほどはたからごらんなると、慘酷なやうにも見えるでせう。然し私はあれのために非常に苦められてゐます。此前怪我をした時から、いろ〳〵で千圓近く支拂はされてゐます。然もあれの病氣は宗教だとか、思想だとか言つてゐますが、實はお話にならない醜惡な、淺ましいことに原因してゐるのです。いやあれは一種の色情狂なのです。其ことは最近まで判然しなかつたのですが、あれが何時も家を脱け出す場合は、定つてN市から西の方をうろつくといふことを知りました。それでいろ〳〵研究して見ますと、實に淺しい事實を發見したのです。確かあれの十五の秋でした、私の家に養蠶の手傳ひに來たお高といふ女がありました。あれは其女に騙されたらしいのです。其女の家は確かにN市の西山部ださうです。それからあれの頭の中には黑い物が充滿して、常にみだらな妄想を描いてゐるのです。實際あんな人間はあの時、車の下に轢かれて死んで呉れた方がどんなに幸福だつたか。」

私は友の兄の述懷を聞いてゐる裡に、今迄友の上に描いてゐた美しい幻影は悉く破られたやうに思ひました、然し何故か私はそれを强ひて打ち消さうといふ氣にはなれなかつたのであります。白狀すれば、此話を聞いて私は友の上に寧ろ凱歌を揚げたいような心持をさへ覺えたのであります。

其晩友の家で夕飯の馳走になつて歸る頃の私は、友の兄にも、老人にも同じいやうな同情の湧くのを覺えました。此世の中は親と子のやうなどんな親しいもの同志でも自分の肉體を支へて行く爲めには、憎み戰はなくてはならないように出來てゐるのだ。たとへそれが正しくないことだとしても、それは事實なのだ。確かに友の家族は友の生を呪つてゐる。がそれだからとて彼を愛してゐないことにはならないのだ。かう思ふと私は友の祖父も、父も、そして友も、果ては自分自身迄が、凡て此地上に生を享けてゐる人間が妙に寂しい賴りないものに思はれたのであります。

三星霜――それは、その時から今日迄に流れた月日であります。其長い年日の間、友はあの冷めたい物置小屋の隅に冷酷な父と弟の鞭の下に耐へ忍んで來たのであります。そして友は最後に自分の呪はれた一切の生を消滅させる爲に、あの火山の噴火口を選んだのでありま

せう。

汽車は何時の間にか輕井澤を發して、秋の七草で名高い追分の高原をひた走つてゐました。

其時、新聞紙から放した瞳を窓外に移すと、緩やかに吹きなびく淺間の噴煙に、朝の陽が金色に映へて、其處には友を呑んだ恐るべき巨口の存在は信じられないほどの靜けさと、莊嚴さとがありました。

そして、其時私の眼に映つたそれは、果してあの久遠の戀人のそれであつたでありませうか。(完)

後りに

□

血に繋がる人々の冒頭に添へた序文は、中央公論紙上に掲げたものをそのまゝ引用したものである。あれを書いた當時から見ると、作者の思想上にも種々な意味で、變化を來たしてゐる。其結果として、遺憾に堪へないのは、當然本編に加へるべき筈の信濃時代——卽ち第二卷に屬すべきものを、加へ得ないことである。此一卷は自分が千鶴子を知り、畏友亮平を知り、新しき村を知つた前後の、精神上の革命期を取り扱つたもので、自分としても相當に愛着の深い作ではあつた。多少の不滿をも擲つて、幾度か此編に加へようとも思つた。然し私は此稿を整理するに先立つて、その全部を燒却した。强ひて此編に加へようとする自分の動機が、不純なものであることを發見した。といふ以上に說明したくない。もう一層作者の頭の中で、材料の醱酵を待つて、改めて筆を執る考へである。その日迄默許して戴きたい。

□

巻末に添へた「ある反抗兒の手紙」と他の一篇は何づれも最近の作で、自信のある作でないにしても、作者に取つて懐しい作品であることに變りはない。

□

大正八年の夏、日向青島の海近き漁夫の家の二階で、此稿を起してから、大正十年十月鄕里信濃の山の上の街にて、不滿足ながら最後のペンを擱いた日迄三年の歳月は流れ去つた。思へば暗く、傷しい月日であつた。私にして若し、蹂躙られたる雜草の影にも、感謝と、幸福との花の微笑むものであることを、よく感じ得なかつたとしたら、何うして白日の中に此稿の最後のペンを擱き得るの日に廻り逢ふことが出來たであらう、病弱なる妻よ、幼なき子よ、私は感謝する。時としてお前達の爲に絶望もし、苛立ちもし、激しい物質の欠乏とも闘はなければならなかつた私は、どれほどお前達二人によつて、慰撫も、力も感じて此稿を續け得たであらう。

□

私は貧しきもの、虐げられしもの、躓き多きもの、味方だ。そして其中にあつて希望と、

美しさとを失はないものを讃美する。而して、私は之等の如何なる種類の人間の裡にも、永遠と、光明とを慕ふ心を認める。其處にこそ希望が湧き、美が生ずると深く信ずるものだ。私は既成基督敎徒に依ると、明かに異端の徒であるかも知れない。何故なら私は永生を、神を、最後の審判を信じ得ないからである。とは言ひ、かうした自分の心の裡にも永遠を慕ふ心を認める。それは同時に光明を慕ふ心である。そして此心こそ私の藝術の生れる母胎である。

□

未發表のまゝ此編に加へた「傷しき場面」は、「靜かなる朝」と共に、東京時代の作者の生活の一面である、ただ此作は形式を戯曲に假りたといふのみで、これによつて戯曲としての効果を收めようとは素より期してはゐない。私はそれほど、戯曲としての約束を無視して筆を執つたものである。

□

而して私は、是等の凡ての作が、未完成の作であつたとしても、作の出來、不出來、若くは

批評を超へた何ものかゝ讀む人の胸に殘らずにはゐないであらうことを信ずる。——此處に描かれたる眞實と、是を書きつけたるものゝ熱情と眞心とがそれだ。

□

冬が郊外の小さな家にも押寄せて來ようとしてゐる。毎朝のやうに庭土の上層が凍みて龜裂を生ずる。その庭の中央に、私は樹や、炭俵を集めて焚火をするのだ。妻が赤く血の吹く濡れた手を、割烹着で拭き〳〵臺所から出て來る。小さなゴム靴を穿いた亮一がヨチ〳〵歩きで跟いて來る。空は碧く、そして深い。碧い空の下で一家總出で焚火を圍む心は、自由な遊牧者のそれにも似たものがある。私は幸福である。いと貧しきものゝ幸福は、此小さな庭に撒き散らされてゐるのだから。

千九百二十一年十一月末日

瀧の川の家にて

著者

ある迷宮の舞踏者

定價貳圓六拾錢

版權所有

大正十一年一月十五日印刷
大正十一年一月二十日發行

著作者　塚原健二郎

發行者　北原鐵雄
東京市神田區仲猿樂町十五
合資會社アルス代表者

發行者　鈴木藏泉
東京市神田區仲猿樂町十五

印刷者　山本源太郎
東京市小石川區久堅町四五

製本　小川

發行所　合資會社アルス
東京市神田區仲猿樂町十五
振替東京二四八八八番
電話九段二一六九番

高倉輝著　三部曲　女人焚殺　定價貳圓八拾錢　送料拾八錢

宇野浩二著　美女　定價貳圓　送料拾貳錢

谷崎精二著　別宴　定價壹圓六拾錢　送料八錢

菊地寛著　文藝往來　定價壹圓六拾錢　送料八錢

若山牧水著　靜かなる旅をゆきつつ　定價貳圓五拾錢　送料拾貳錢

村山槐多遺稿　槐多の歌へる　定價貳圓五拾錢　送料拾四錢

村山槐多遺稿　槐多の歌へる其後　定價貳圓五拾錢　送料拾貳錢

北原白秋著　歌集　雀の卵　定價參圓八拾錢　送料貳拾七錢

北原白秋著　歌集　雲母集　定價貳圓參拾錢　送料拾貳錢

與謝野晶子著　歌集　太陽と薔薇　定價貳圓五拾錢　送料拾貳錢

北原白秋編　第二木馬集　定價壹圓八拾錢　送料八錢

北原白秋著　歌話　洗心雜話　定價壹圓八拾錢　送料八錢

北原白秋著　白秋小品　定價貳圓　送料八錢

上田敏選註　小唄　定價壹圓八拾錢　送料八錢

北原白秋著　白秋詩集　全二卷　定價各貳圓八拾錢　送料各拾貳錢

北原白秋著　抒情小詩　わすれなぐさ　定價壹圓八拾錢　送料八錢

北原白秋著　白秋小唄集　定價壹圓八拾錢　送料六錢

三木露風著　抒情小詩　生と戀　定價壹圓八拾錢　送料六錢

日夏耿之介著　黑衣聖母　定價貳圓五拾錢　送料拾貳錢

新詩會編　現代詩集　定價貳圓五拾錢　送料拾貳錢

牧神會編　牧神詩集　定價貳圓貳拾錢　送料拾貳錢

13

北原白秋著	とんぼの眼玉	定價壹圓九拾錢 送料拾錢
北原白秋著	兎の電報	定價壹圓九拾錢 送料拾錢
北原白秋譯	英國童謠 まざあ・ぐうす	定價貳圓八拾錢 送料拾貳錢
三木露風著	眞珠島	定價貳圓八拾錢 送料拾貳錢
德永壽美子著	薔薇の踊子	定價壹圓八拾錢 送料八錢
山本鼎著	美術家の欠伸	定價貳圓 送料拾貳錢
山田源一郎著	樂譜の讀み方	定價壹圓參拾錢 送料八錢

落